

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

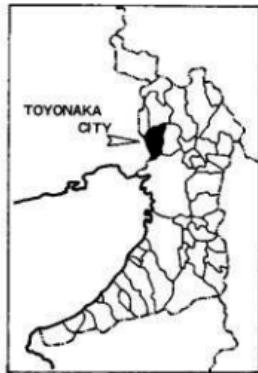
1985年度

1986年3月

豊中市教育委員会

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1985年度



1986年3月

豊中市教育委員会

## 序 文

豊中市は、大阪平野の北西部に位置し、猪名川の流れと千里丘陵の縁に育まれて、古来より、豊かな自然と文化を受け継いできました。しかし近年はこの地も、大阪のベッドタウンとして、また、交通網の要所として開発が進み、近代都市へとその姿が大きく変貌してまいりました。

開発の進みゆく今日の社会においては、古くから伝わる文化が、人びとの心をやすめる糧として大きい価値、役割をはたしております。先人から受けつがれてきた文化遺産を、現代の生活に活かしながら、後世に伝えていくことは、現代に住まう私たちの責務ではなかろうかと考えます。

この報告書は昭和60年度に豊中市教育委員会が、国並びに大阪府の補助を受けて実施した、御獅子塚古墳、山ノ上遺跡、新免遺跡調査の報告であります。このたびの、調査において、市内遺跡の内容を明らかにする上で貴重な発見となるすぐれた成果が得られました。今後は公開、展示を行なうなどし、郷土史の理解と解明に役立つことを願っております。

なお、調査の実施にあたっては、諸先生方に多くのご指導を賜り、土地所有者、近隣住民の皆様には文化財の重要性をご理解いただくなど多大のご協力を賜りました。また文化序、大阪府教育委員会並びに関係機関には格別のご指導とご協力をいただきました。こうした多くの方々のご支援によって、本市の、文化財行政がより一層推進できることに対し、関係各位の皆様に深謝申しあげます。

昭和61年3月31日

豊中市教育委員会

教育長 湯元英世

## 例　　言

1. 本書は、豊中市教育委員会が昭和60年度国庫補助事業（総額 6,000,000円、国庫50%、府費25%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査概要報告書である。
2. 本年度の調査は、御獅子塚古墳、山ノ上遺跡、新免遺跡について実施した。調査は昭和60年7月15日～昭和61年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を行なった。
3. 本書は、調査担当者を中心に全員が作成し、各報告の例言にその文責を明らかにした。全体の編集は田上雅則、山元建が担当し、遺物写真撮影は山上が行なった。
- 整理作業は、調査担当者ならびに柳本照男、服部聰志の指導のもとで、福永伸哉、松木武彦（大阪大学）、加藤志月、酒井泰子、奥野聰子（関西大学）、今井直美（大手前女子大学）の協力を得た。
4. 調査の進行にあたって、豊中市文化財保護委員藤沢一夫氏・都出比呂志氏、関西大学教授網干善教氏、大阪府教育委員会文化財保護課堀江門也氏により、御指導、御助言をいただいた事に対して深く感謝いたします。
5. 各調査地の土地所有者、及び近隣住民の方々には、文化財保護並びに調査に対して深く御理解をいただいた事について、各報告の例言に明記するとともに、深く感謝いたします。

## 目　　次

I. 御獅子塚古墳 .....	1
II. 山ノ上遺跡 .....	33
III. 新免遺跡(13・14次) .....	45

	遺跡名	調査地	調査面積	調査担当者	調査期間
I 25	御獅子塚古墳	南桜塚2丁目2番地	2,000m <sup>2</sup>	山元 建 柳本照男	昭和60年7月15日～同年10月9日 昭和60年11月18日～61年2月20日
II 14	山ノ上遺跡	宝山町19番地	120m <sup>2</sup>	山元 建	昭和60年11月18日～同年11月30日
III 13	新免遺跡13次	玉井町3丁目53番地 他	96m <sup>2</sup>	田上雅則	昭和60年9月9日～同年9月25日
III 13	新免遺跡14次	玉井町2丁目144番地 他	170m <sup>2</sup>	田上雅則	昭和60年10月11日～同年11月6日

\*遺跡名の番号は周辺遺跡分布図と対応する。



- |            |                 |            |            |
|------------|-----------------|------------|------------|
| 1. 待兼山古墳   | 2. 堂池北造跡（宮の前遺跡） | 3. 堂池東造跡   | 4. 待兼山東跡   |
| 5. 荻原遺跡    | 6. 桜井古窯跡群       | 7. 堂池西造跡   | 8. 南刀根山遺跡  |
| 9. 本明遺跡    | 10. 新免宮山古墳群     | 11. 金寺山廬寺跡 | 12. 黄瀬遺跡   |
| 13. 新免遺跡   | 14. 山ノ上遺跡       | 15. 海冢古墳   | 16. 猪名寺跡   |
| 17. 口酒井遺跡  | 18. 川能遺跡        | 19. 鹿田西造跡  | 20. 佛部遺跡   |
| 21. 横塚古墳群  | 22. 小石塚古墳       | 23. 大石塚古墳  | 24. 大塚古墳   |
| 25. 御狮子冢古墳 | 26. 南天平塚古墳      | 27. 鹿田遺跡   | 28. 曾根遺跡   |
| 29. 城山遺跡   | 30. 里部遺跡        | 31. 小曾根遺跡  | 32. 北条遺跡   |
| 33. 磐人遺跡   | 34. 豊島北造跡       | 35. 德傾遺跡   | 36. 楼堂の前遺跡 |
| 37. 利倉遺跡   | 38. 利合西造跡       | 39. 上津島遺跡  | 40. 上津島南遺跡 |
| 41. 鳥田遺跡   | 42. 庄内遺跡        | 43. 鳥江遺跡   | 44. 菩提寺遺跡  |
| 45. 若王寺跡   | 46. 下坂部遺跡       | 47. 御神山古墳  |            |



# 御獅子塚古墳調査概要報告

## 例　　言

1. 本書は豊中市中桜塚2丁目2番地に所在する御厨子塚古墳の概要報告書である。
2. 発掘調査は、昭和60年7月15日から同年10月9日（2次調査）・同年11月18日～昭和61年2月20日（3次調査）にかけて実施した。
3. 発掘調査は、本市教育委員会社会教育部社会教育課文化係が実施し、山元建（2次）・柳本照男（3次）が現地を担当した。
4. 本書の執筆及び編集は山元があたった。
5. 今回の報告は、古墳の形状・規模・主体部等の確認のために行った調査の概要報告書である。したがって主体部も含めた調査の報告は別途計画しているので詳細は正報告に委ねることにする。

## 目　　次

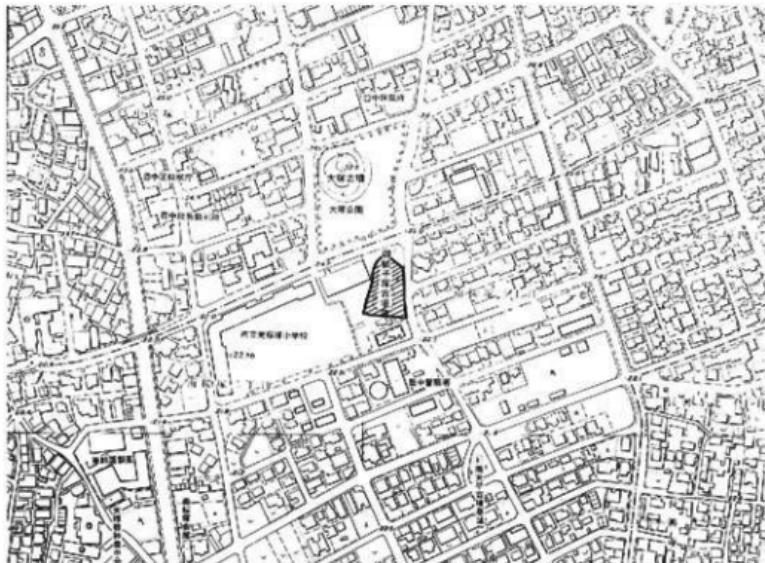
I.はじめに	3
II.周辺の遺跡	4
III.調査の概要	4
IV.出土遺物	14
V.まとめ	18

## I. はじめに

御舞子塚古墳は、豊中市南桜塚2丁目2番地に所在する古墳である。豊中市岡町、桜塚一帯は古くより古墳が多く存在することが知られ、桜塚古墳群と呼称されている。その多くは宅地開発の波に洗われ、現在では5基が残っているにすぎないが、明治初年の古地図によると、かつては36基存在したことが知られている。御舞子塚古墳は桜塚古墳群を東西二群に大別した場合の東群の盟主墳の一つと考えられる。

調査前の当墳は墳頂部が大きく削平され、後円部から前方部にかけて全くの平坦面を形成していた。また、東くびれ部附近も幅20mにわたって弓なりにえぐられ、無残な地肌を露呈していた。しかし、墳丘の西半部および後円部北側、前方部端面は、西接する南桜塚小学校体育館建設の際に墳輪が出土したなど破壊をうかがわせる記録が『豊中市史』第1巻にあるもの、概ね旧状を保っていると考えられた。

この御鄰子塚古墳に学術的な調査が及んだのは昭和59年のことであり、後円部西側の周濠を検出した(第1次調査)。さらに、昭和60年7月15日より翌年2月20日にかけて、古墳の史跡公園計画に基く基礎調査として、古墳の規模・形状・主体部等を把握するため、調査を実施した。



第1圖 調查地點位置圖 (1/5,000)

## II. 周辺の遺跡

桜塚古墳群は、古墳時代中期の古墳群として古くから知られており、前述したように少なくとも明治初年には36基存在したことが判明している。古墳群は大石塚・小石塚古墳を中心とする西群と、大塚古墳・御獅子塚古墳を中心とする東群に大別される。しかし、古墳群西方の山ノ上遺跡で地輪片が出土したことなどから、本来はさらに多くの古墳が存在したようである。また、古墳群の時期についても昭和54年に実施した発掘調査により大石塚・小石塚古墳が前期末にまで遡ることが判明した。なお、山ノ上遺跡からは桜塚古墳群に並行する時期の竪穴住居を検出しており、注目される。

周辺の遺跡に目をやると、桜塚古墳群の位置する豊中台地の西縁部あるいは猪名川流域の沖積平野を中心に、弥生時代以降遺跡が急増し、開発がこの時期に進んだことを示している。弥生時代以来の集落である田能遺跡、弥生時代の墓地である勝部遺跡、また最近その性格が明らかになりつつある新免遺跡などがその例としてあげられよう。また、原田神社の境内からは外縁鉢式流水文銅鐸を含む2個の銅鐸が出土している。当古墳群以外の古墳も周辺に存在する。前期古墳としては北方に新免上佃古墳、御神山古墳が知られ、中期は当古墳群に収斂するが、後期になると北方に、桜井谷古窯址群との関係が考えられる太鼓塚古墳群あるいは新免宮山古墳群が知られる。なお、南方の穂積遺跡から削平された古墳の削濠が確認され、台地・丘陵上のみならず、低地にも古墳が築かれていたことが判明した。

## III. 調査の概要

調査は、墳丘の規模・形状の把握を第一の目的としたため、墳丘の要所要所にトレンチを設定する方法をとり、トレンチはその位置により、後円部北トレンチ、西くびれ部トレンチ……と呼称した。また、後円部頂には主体部確認用のトレンチも設定した。なお、トレンチの南北の主軸は、磁北より $14^{\circ}42'$ 東に振っている。

今回は、確認し得た全体の規模・形状、および後円部北トレンチ、西くびれ部トレンチ、前方部南西コーナートレンチ、前方部南トレンチ、主体部確認グリッドについて簡単に触れる。

### 1. 規模・形状（第16図）

御獅子塚古墳は、従来から考えられていたように南向きの前方後円墳であることが判明した。なお、古墳各部の数値は以下の通りである。

全長（周濠も含む） 70m （推定）

（墳丘のみ） 55m

後円部直径 36m （推定）

前方部端面幅 40m

ただし、周濠部も含めた全長は、前方部端面側の周濠の外側肩部を検出していなかったため、推測の域を出ない。しかし実際と大きく違うことはないであろう。なお、高さは現状では墳丘基底部より約4mを測るが、少なくとも後円部ではさらに1m程度の封土があったと思われる。

墳丘は、2段築成で、2段目斜面にのみ葺石を葺く特異な形態を呈することも明らかになった。また、1段目テラス面の外側寄りに円筒埴輪を、墳頂部には形象埴輪を立て並べていたことが判明した。しかし、形象埴輪は、原位置を保つものは1点もなく、すべて2段目斜面を中心に転落した状態で出土している。なお、東西両くびれ部に造出し等の施設は認められなかつた。

### 2. 後円部北トレンチ（第2図・図版2）

後円部北トレンチでは、1段目斜面、同テラス面、2段目斜面を検出した。斜面の傾斜角は、各々25度、23度、斜面長は3.8m、3.6m以上である。

1段目テラス面は幅約2mではほぼ平坦である。テラス面の最も外側に円筒埴輪列を巡らせるが、西壁附近は攪乱され円筒埴輪は検出できなかった。

2段目斜面は上部は大きく削られ凹状を留めていないが、本来は径10cm程の石を全面に葺いていたと考えられる。調査時には基底部のみが残存しており、基石列は、長さ25cm程の角ばった石を長辺が斜面裾部に平行するように配している。しかし、後述する西くびれ部や前方部南西コーナー部に比べると整然さに欠ける感は否めない。

また、墳丘部分の出土物は最大で厚さ1.5mを測り、大きく上・下層に分けられる。黄褐色粘質土を中心とする下層は自然流出土と考えられ、埴輪、葺石等を多く含んでいる。灰白色粘質土を中心とする上層は、近世以降に墳頂部が人為的に破壊された際の削平土と考えられる。

周濠は、墳丘基底部より外側肩部上端までの幅約6.5m、深さ0.8mを測る。なお、周濠埋土最下層より瓦器が出上し、少なくとも中世には、まだ大部分は埋まっていなかったようである。

### 3. 西くびれ部トレンチ（第3・5図、図版3・4）

西くびれ部においても1段目斜面、同テラス面、2段目斜面および周濠を検出した。1段目斜面の傾斜角は後円部側、前方部側で各々37度、26度、2段目斜面では後円部側で23度を計る。

1段目斜面長は、後円部側で1.9m、前方部側で3.5mを計る。なお、2段目斜面、1段目テラス面からは、各々葺石、円筒埴輪列を検出した。

1段目斜面は明瞭なくびれを形成せず、全体に内湾している。そのため、円筒埴輪列の変化点附近の1段目斜面上半は非常にゆるやかな斜面となっている。なお、トレンチの西端の周濠部分に円筒埴輪列にはほぼ平行する深さ5~10cmの落ちが認められ、おそらく墳丘基底部を画するものと考えられる。

2段目斜面の葺石は、上半部の一部を除いて極めて良好な状態で検出した。葺石の基石は、

埴輪列と並行し、両者の距離は約1.5mである。石材は径15cm前後のものが多いが、10cm以下のものもかなり目につく。基石部分はやや大きめの石を後円部で3列、前方部で2列配し、特に最下段の基石は長さ20cm程を測り、長軸を斜面裾部に平行させている。そして、前方部と後円部の接点部分は長さ25cm程の石を2~3段重ねて強固な造りとなっている。2段目斜面の葺石には縱方向に石が並ぶように見える部分もあるが明確ではない。

1段目テラス面の円筒埴輪列は全部で27基検出した。各埴輪は上半部が全て崩壊し、専ら1段目斜面側に落ち込んでいた。埴輪はほとんど取上げなかったため詳細は不明であるが、1段目テラス面を溝状に掘削後、黄褐色あるいは黄白色粘質土で途中まで埋め、その面上にほとんど間隔を置かずして並べている。埴輪の基底部のレベルは一定しておらず、1段目のタガがテラス面のレベルより高いものもあれば、低いものもあるといった状況である。おそらく、殆どの円筒埴輪に赤色顔料を塗布し、須恵質のものもまじえる。崩壊した埴輪の上半部破片の観察からほほ7本に1本が翫頭形埴輪であるとみられる。なお、II-27の断面観察からは、円筒埴輪内部の1段目タガ部分まで灰白色の粘質土を積み込んでいる状態が看取された。

西くびれ部の流出土は、後円部北トレント同様、自然流出土と見られる下層、人為的な削平土と考えられる上層に大別できる。2段目斜面の下層からは、後円部頂から転落したと考えられる形象埴輪を多量に検出した。

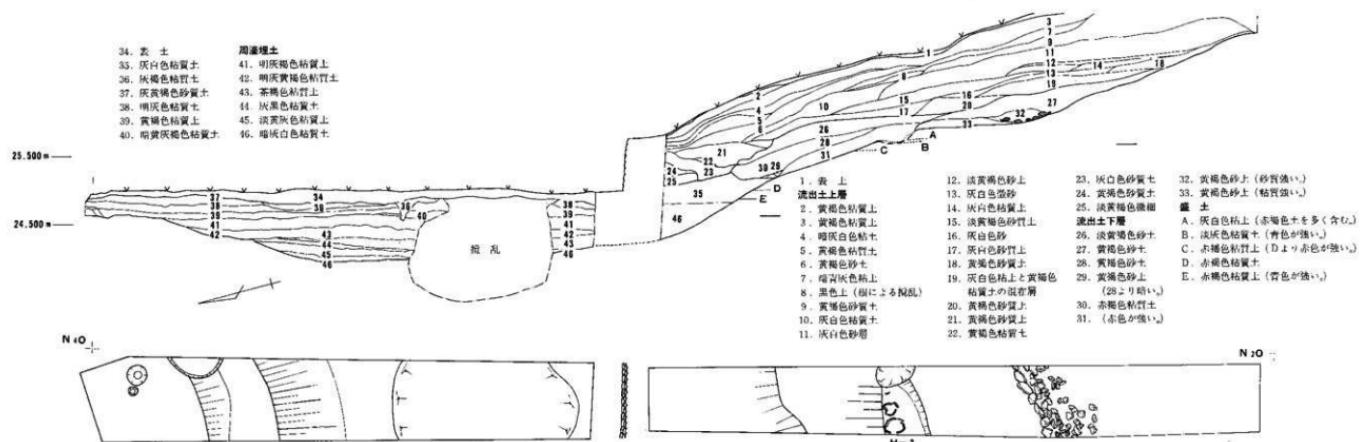
#### 4. 前方部南西コーナートレンチ（第4・6図、図版5・6）

前方部南西コーナーにおいては、1段目テラス面、および2段目斜面の下端部が遺存していた。

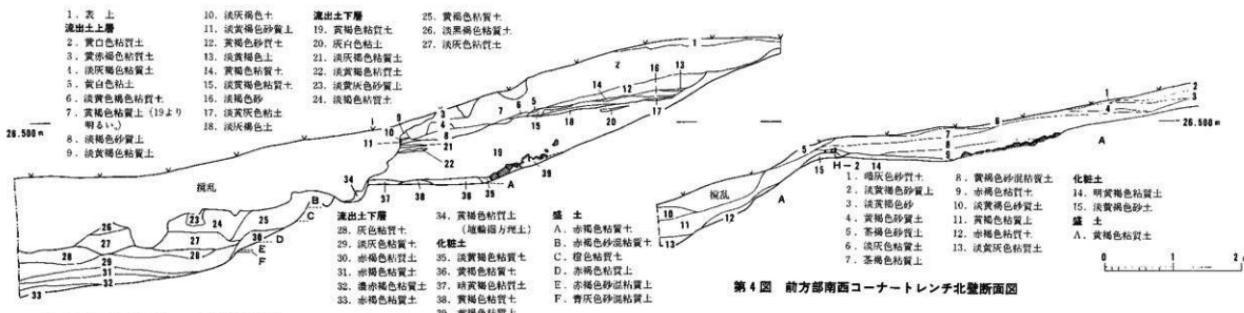
2段目斜面下端部では、側面部幅2.5m、端面部幅3mにわたって葺石を良好な状態で検出した。基石部は、長さ20cm程の石を斜面裾部に長軸を沿わせて並べ、斜面には若干小ぶりの丸みをおびた石を配している。なお、葺石の北端部で、コーナー方向に傾きながら、裾部より縦に伸びる石列が認められ、作業単位を示すものかもしれない。トレント北端の1段目テラス面外端部には前方部側面の埴輪が2基のみ残存していた。葺石と埴輪間は約1.8mを測る。また、1段目斜面は、当初本来の面が遺存していると考えたが、西方の南桜塚小学校々庭に設けたトレントより前方部南西コーナー部分の墳丘基底部を検出したため、かなり削られていることが明らかになった。

#### 5. 前方部南トレンチ（第7図、図版6）

現在の前方部頂より前方部面に設けたトレントである。1段目斜面、同テラス面、2段目斜面を検出した。トレント南端部がほぼ墳丘基底部にあたると考えられる。1段目斜面、2段目斜面の傾斜角は各々34度、15度を計るが、2段目斜面は本来の墳丘面が削られている可能性があり、1段目斜面上半~2段目斜面下半には後世の溝が南北に走っている。2段目斜面下端部には、その溝に一部切られているものの葺石が5段にわたって遺存していた。



第2図 後円部北トレンチ平面図・断面図

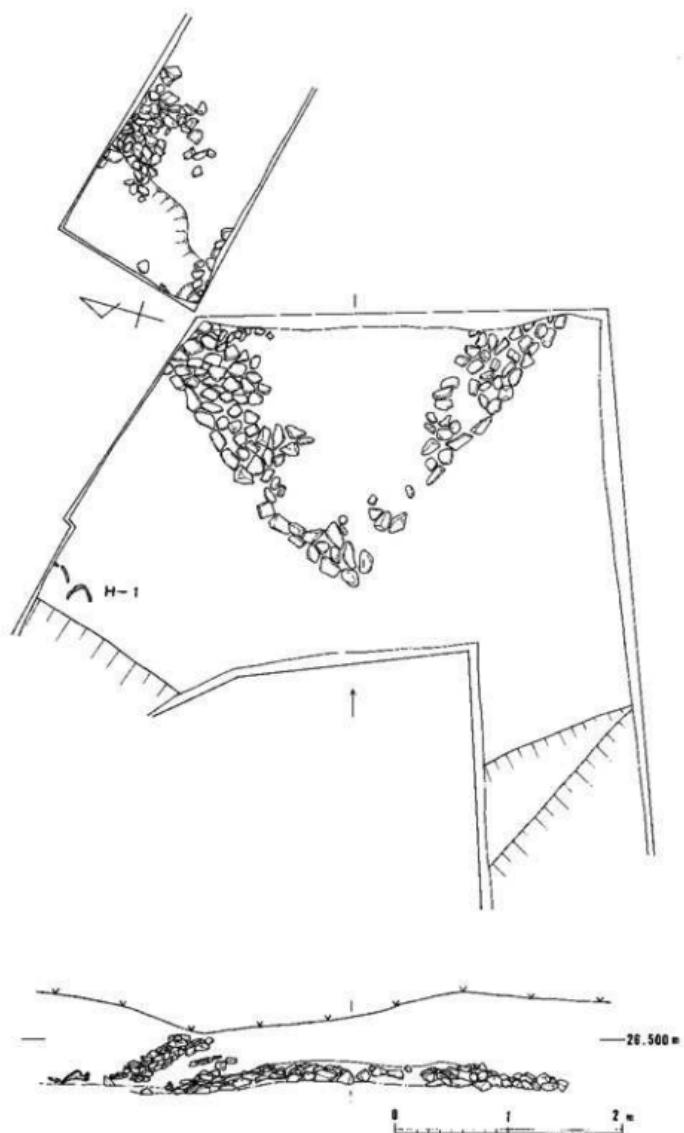


第3図 西くびれ部トレンチ北壁断面図

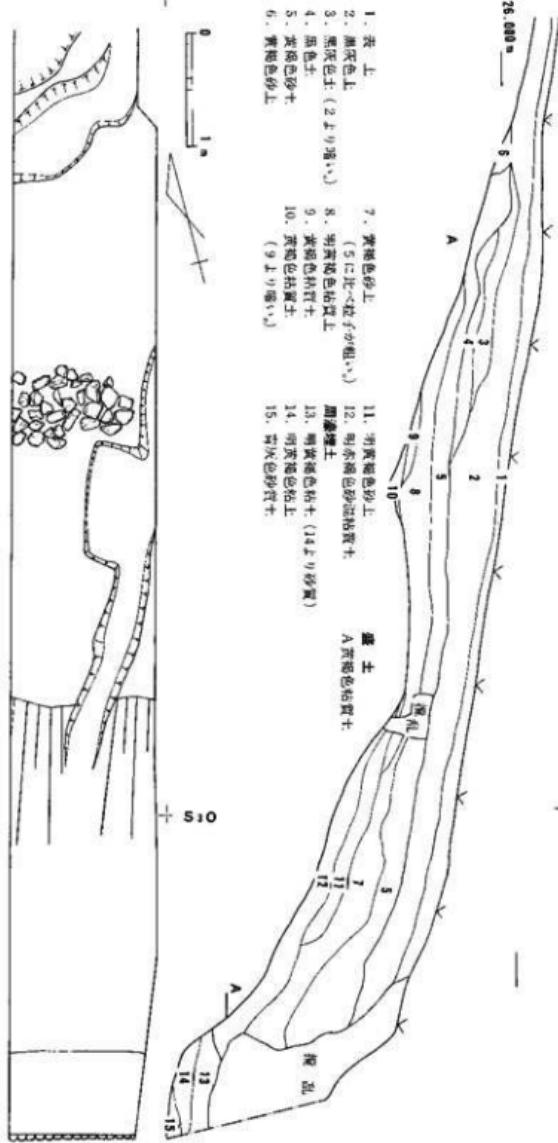




第5図 西くびれ部平面・立面図



第6図 前方部南西コーナートレンチ平面図・立面図

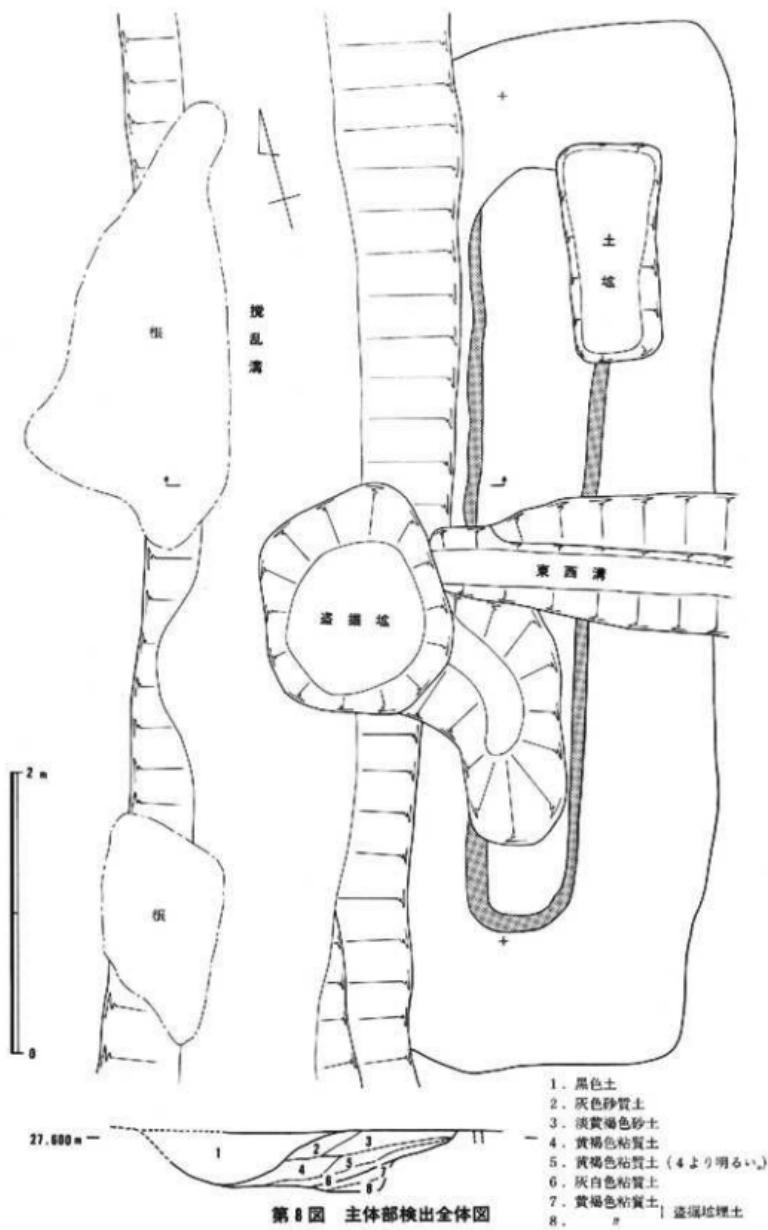


第7図 前方部南トレンチ平面図・断面図

6. 主体部確認グリッド (第8図、図版7)

後円部の東西各トレーンチを延長し、後円部頂の表土を除いて精査した時点で南北方向に走る搅乱溝と1条の粘土帯を検出し、その性格を追究するためトレーンチを南北に大きく拡張した。その結果後円部中心から1.1m東寄りで南北に主軸をとる粘土帯の墓塚および棺側粘土上のラインを検出した。今回の調査は主体部についてはその確認に主眼をおいたため不十分であるが知り得た点を以下に記す。

棺の南半分は南北部分を除いて盜掘で荒されており、また、棺のはば中央には近世の東西溝が走り、北東端も長方形の性格不明の土塙によって破壊されている。さらに墓塚の西半分は幅2.2m、深さ0.4mの前述した搅乱溝によって削られ原形を留めていない。なお、盜掘塚より玉類、搅乱



第8図 主体部検出全体図

溝より多量の形象埴輪および管玉・双孔円板各1点ずつを検出した。また、北東の土坡の西壁に鉄片が露出しており、短甲の可能性がある。墓塚の規模は現状で長さ6.5m、幅0.

85mを測る。棺は、東西溝の



第9図 主体部断面図（東西溝北壁）

断面観察によると、直径0.78mを測り、棺床粘土、棺側粘土の厚さは8cm程度である。また、棺床粘土上面で玉類および鉄片を検出した。

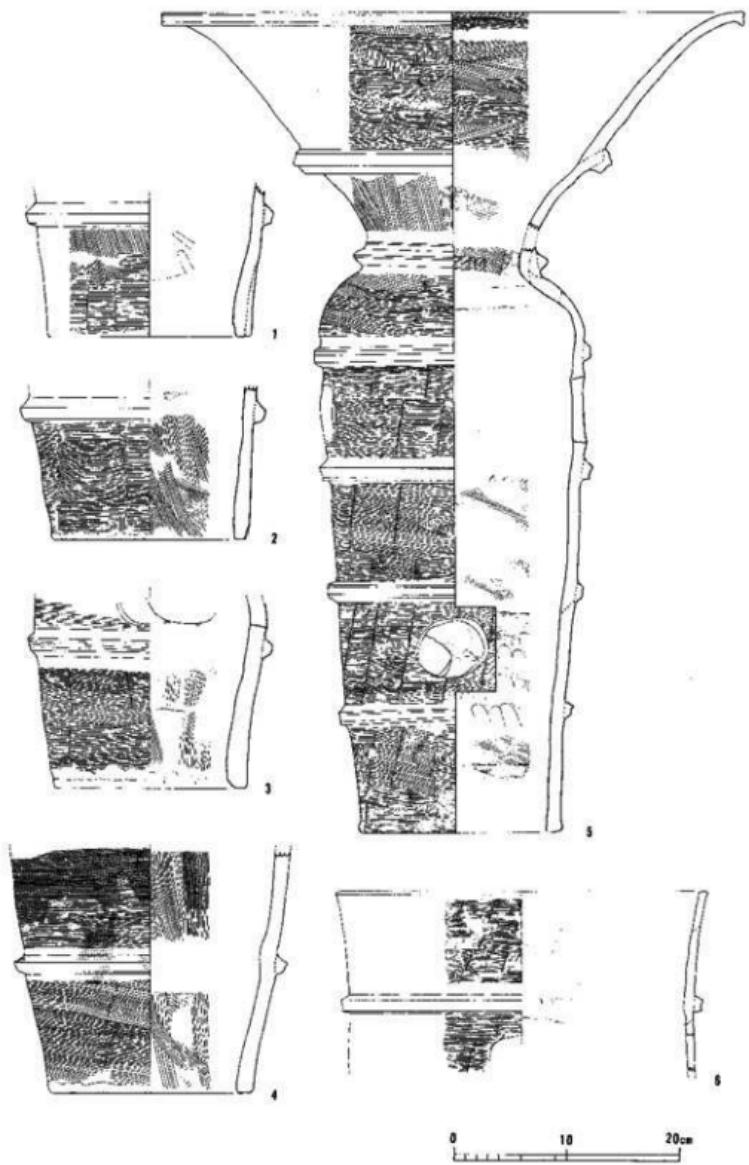
#### IV. 出土遺物

今回の調査で出土した古墳に伴なうと考えられる遺物は、円筒埴輪、形象埴輪、須恵器、玉類、双孔円板等である。

##### 1. 円筒埴輪（第10図、図版8）

今回検出した円筒埴輪には土師質（第10図1～4）と須恵質（第10図5～6）の両者があり、円筒埴輪の透しは全て円形で、黒斑を有するものは皆無である。また、円筒部は川西宏幸氏の言うB種ヨコハケで仕上げるものが殆んどであり、C種ヨコハケは見られない。<sup>(1)</sup>

1は前方部南西コーナートレンチのII-2である。黄褐色を呈し、基底部は直径18cmを測る。内外面とも摩滅が激しいが、外面は6条/cm程のタテハケ、ヨコハケが認められ、内面は基底部でタテ方向、より上部ではヨコ方向、ナナメ方向のナデが認められる。1段目タガは、やや下向きの台形を呈し、ナデで仕上げる。2は、後内部西トレンチのII-2である。淡赤褐色を呈し、基底部径17cmを測る。外面はヨコハケで、一部基底部にタテハケも見られる。ハケメは、5条/cm～10条/cmで複数の原体が考えられる。内面も7条/cmのタテハケ、ナナメハケで、1段目タガ断面は、やや下向きの台形を呈する。3は後内部西トレンチII-1で、黄褐色を呈し、基底部径17cmを測る。外面は、ヨコハケ後、基底部をなで、内面はタテハケ後1段目タガ附近および基底部を指でなでる。タガの断面は丸みを帯びた台形を呈し、ヨコナデで仕上げる。4は後内部北トレンチII-3で、黄褐色を呈し、基底部径18cmを測る。外面ヨコハケ、内面タテハケを施した後、基底部内外面、1段目タガ附近内面をなでる。特に後者はその痕跡より布、あるいは皮を用いたようである。ハケの原体は6～8条/cmを測る。2段目外面にはかなり茶味を帯びる赤色顔料を塗布しその一部がおそらく塗布の際に垂れ落ちたのである。1段目タガ附近にまで及んでいる。1段目タガは端面が下方に向く四角形を呈し、ヨコナデで仕上げる。稜部は比較的シャープである。

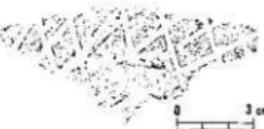


第10図 円筒埴輪実測図

5・6は須恵質埴輪である。5は、西くびれトレンチ部H-4で、朝顔形埴輪である。淡灰～黄灰色を呈し、復元すると高さ73cm、口径52cm、基底部径18cmを測る。

円筒部は基底部より肩部にかけて径を増して広がり、

肩部は丸みを帯びる。2段目・4段目に透孔を一対す

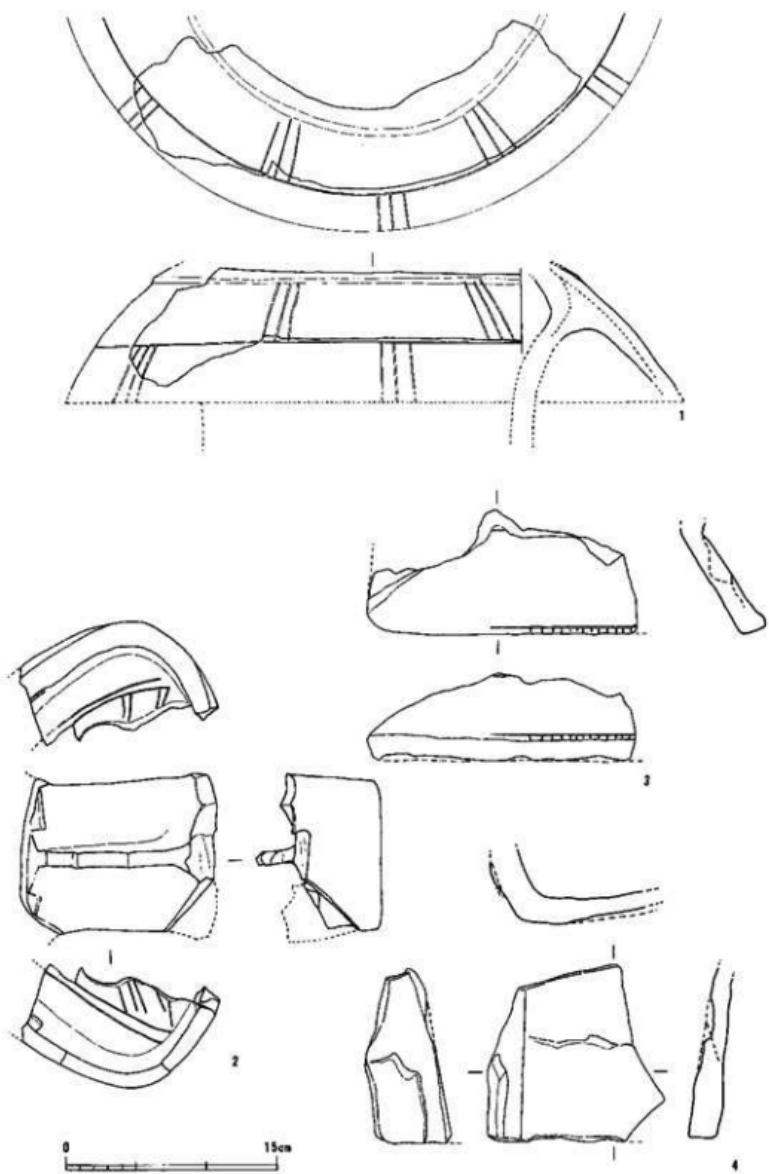


第11図 H-4接合部内面線刻

つ有する。口縁部は、二重口縁状に広がり、端面は、若干凹み、下方にやや伸びておわる。各タガは端面がやや凹んだ台形を呈し、棱線はかなりシャープである。ただし頭部のタガは断面三角形を呈する。外面はタテハケ（1次調整か？）の後、ヨコハケを施す。ただ、口縁部下段にはヨコハケを施さない。円筒部内面はヨコハケ、ナナメハケ後、布皮あるいは指で全面をなでているようであるが、口縁部は、全面ヨコハケである。この朝顔形埴輪で特筆すべきことは口縁部の上段・下段の接合方法であろう。口縁部下段の屈曲部接合面内側に格子状の線刻を幅6cm以上にわたって施し、そこに上段部を接合する。おそらく、粘土の接合を強固にするための工夫であろう。6は、前方部東トレンチ1段目テラス附近の流出土より出土した口縁部で、黄褐色を呈し、復元すると口径33cmになる。外面は7～8条/cmのヨコハケを施し、内面は板状工具あるいは指でなでて仕上げる。口縁端部はヨコナデを施して面を形成する。

## 2. 形象埴輪（第12図）

今回の調査では、家、蕪、轍および動物埴輪の一部とみられるものが後円部、西くびれ部の2段目斜面の流出土を中心に出土した。1は西くびれ部の草石上面より出土した蓋形埴輪の笠部であり、淡黄褐色を呈し、約1/4を検出した。復元すると直径44cm程になると思われる。線刻をもって上下2段に分離し、各々の段に交互になる形で3条の縱の線刻が認められる。復元すれば各々笠部を7区画に分割するようである。なお、最上部に扁平な突帯を貼りつけ、全体に赤色顔料を塗布する。2は後円部西トレンチ流出土下層より出土した蓋形埴輪の笠部の先端につく装飾部分と考えられ、黄褐色を呈し、現存部分で長さ14.0cm幅11.4cm、高さ8.8cmを測る。笠部側から先端部にかけて大きく反り上がり、中央に直角に立上がる板状の部分が取り付けられている。各々の先端には突起が見られ、板状の部分の側面には線刻が施されている。以上の2点からみて、御獅子塚古墳の蓋形埴輪には、笠部に装飾を施すものと施さないものがあることがわかる。3は、西くびれ部トレンチの1段目斜面の流出土下層により出土した家形埴輪の屋根の部分と考えられ、黄褐色を呈し、現存部分は、長さ19.0cm、幅9.0cm、高さ6.2cmで、軒先の一部に網代状の線刻が見られる。なお、上端に平坦部分がわずかに観察でき、入母屋造り建物の入母屋部分、あるいは2階建建物の1階部分の可能性がある。4は、家形埴輪の基底部コーナー部分で、3と重なりあって出土し、同一個体の可能性が強い。黄褐色を呈し、現存部分で長さ9.2cm、幅4.4cm、高さ12.6cmを測る。全体に剥離が激しいが、下端部の一部に粘土帶を貼り付けている。



第12図 形象埴輪実測図

### 3. 須恵器（第13図）

1は後円部北トレンチの2段目斜面の葺石直上で転落した状態で出土した壺の上半部である。口縁部径19cmを測る。球形の体部にゆるやかに外反する口頸部が続き、端部には1条の沈線が巡る。体部外面は平行タタキの後、回転ナデ調整、カキメ調整を行なうが、カキメ調整の不十分な部分はタタキメ、回転ナデ調整がそのまま残る。また、内面は同心円

文をそのまま残す。陶色編年の1型式後半に属するものであろう。2は無蓋高杯の杯部と考えられるもので、後円部北西トレンチ周辺埋土より出土した。楕円状の杯部上半には沈線が巡り、杯部径は14cm程になると思われる。脚部は6方向の透孔があったものと推定される。杯部内面には一部に自然釉が付着し、断面内部は赤褐色を呈する。楕円状のやや深めの杯部、多窓透などの形態的特徴、あるいは透孔間の四面の丁寧なヘラケズリ、杯部外面の指ナデ調整などの技術的特徴からみて、TK-73段階の須恵器と考えられる。  
(3)

### 4. 玉類・石製品（第14図、図版8）

1・2は管玉でいわゆる碧玉製である。1は盗掘址から出土したもので長さ3.6cm、直徑0.75cmを測る。両面穿孔である。2は攪乱溝から出土したもので破損しており、現状では長さ2.1cm、直徑7.5cmを測る。3は盗掘址から出土した碧玉製の勾玉である。長さ3.2cmを測り、頭部に片面穿孔を施す。4は攪乱溝より出土した滑石製の双孔円板で縦1.9cm、横2.1cm、厚さ2.5cmを測る。表面に0.6cmの間隔をおいて2孔を穿つ。両面に調整の際の擦痕が残る。これらの遺物は、後円部頂の主体部に伴なっていたものであろう。

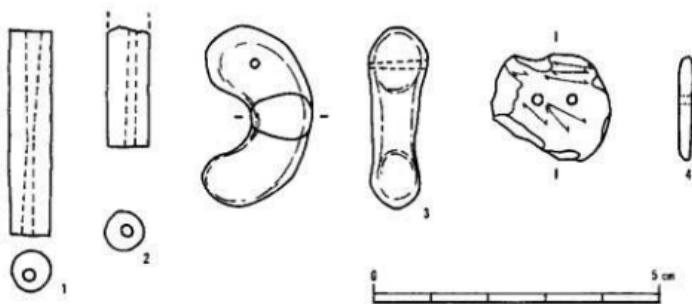
註(1)川西宏幸「円筒地輪船」『考古学雑誌』第64巻2号 1978年

(2)大阪府教育委員会「陶色」Ⅲ (大阪府文化財調査報告書 第30号)

(3)同 上

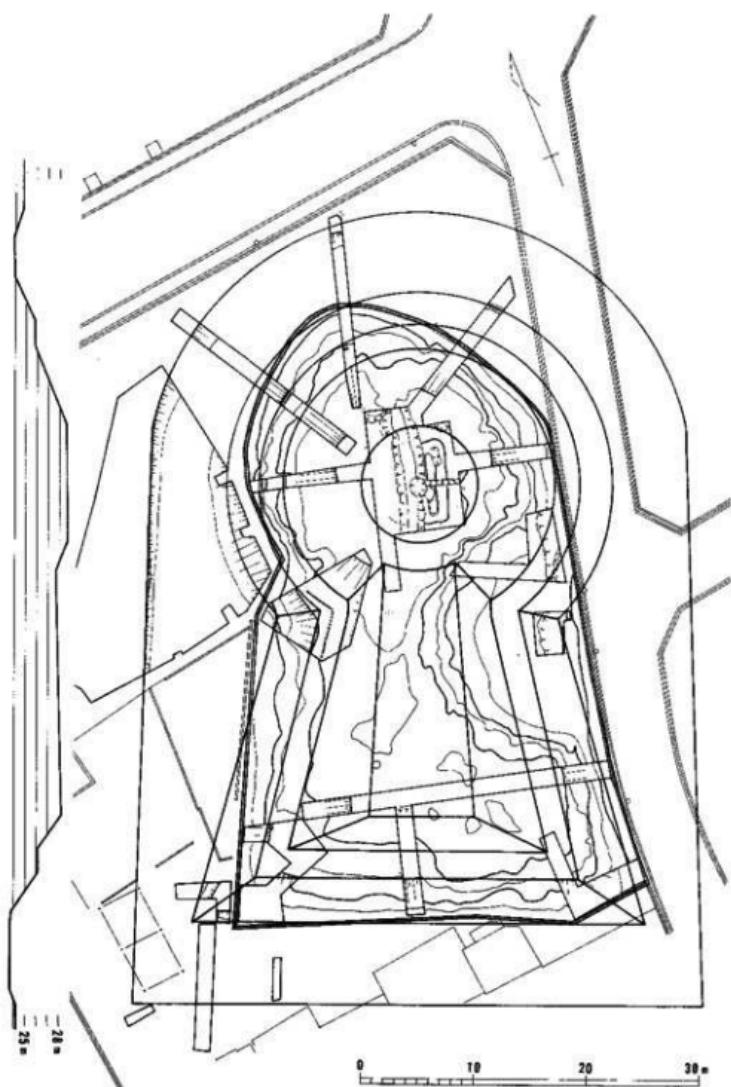
## V. まとめ

今回の調査は、御獅子塚古墳の史跡公園化構想に伴なう基礎調査として実施したものである。その結果、御獅子塚古墳は南向きの前方後円墳であることが判明し、その規模を再度記すと、周濠を含めた全長70m、墳丘の全長55m、後円部径36m、前方部幅40mである。また、2段築成で1段目テラス面および墳頂部に埴輪を巡らし、2段目斜面にのみ葺石を配すると言う特異な形態をとる

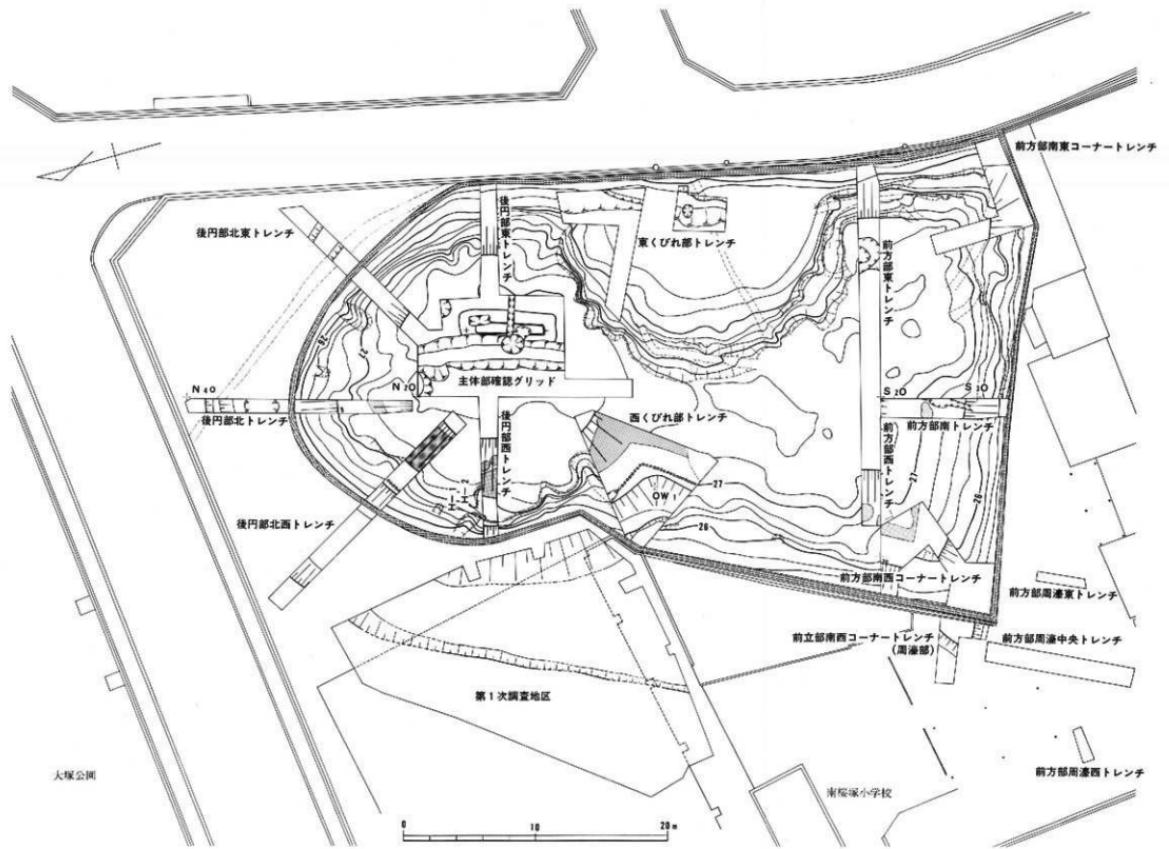


第14図 玉・石製品実測図

ことも判明した。後円部底で粘土櫛を検出できたことも、当初既に消滅したものと考えていただけに大きな成果と言えるであろう。なにぶんにもまだ調査結果については充分な整理を終えておらず、詳細は本報告にゆずらねばならない。ただ築造時期について一言触れておくならば、円筒埴輪に頗る特質のものを含むこと、前方部幅が後円部径を若干上回ることなどから概ね5世紀後半とみてよいと思われ、北方の大塚古墳より若干下り、南方の南天平塚古墳に近い時期が考えられよう。



第15図 想定復元図



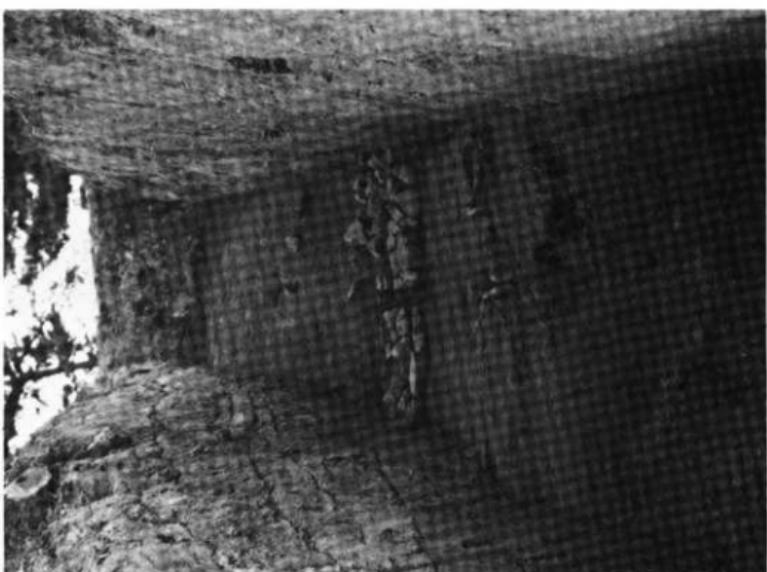
第16図 御獅子塚古墳全体図

# 図 版

図版1 御獅子塚古墳



航空写真（上が北）



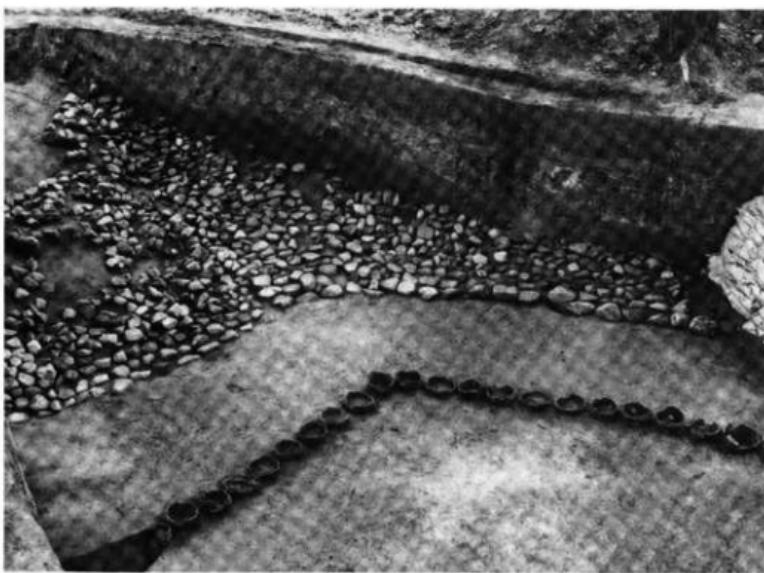
(1) 後円部北レンチ葺石・円筒埴輪列



(2) 後円部北レンチ周溝



(1) 西くびれ部トレンチ葺石・円筒埴輪列（南から）



(2) 西くびれ部トレンチ葺石・円筒埴輪列（西から）



(1) 西くびれ部トレンチ円筒埴輪列（東から）



(2) 西くびれ部トレンチ埴石（前方部から後円部をのぞむ）



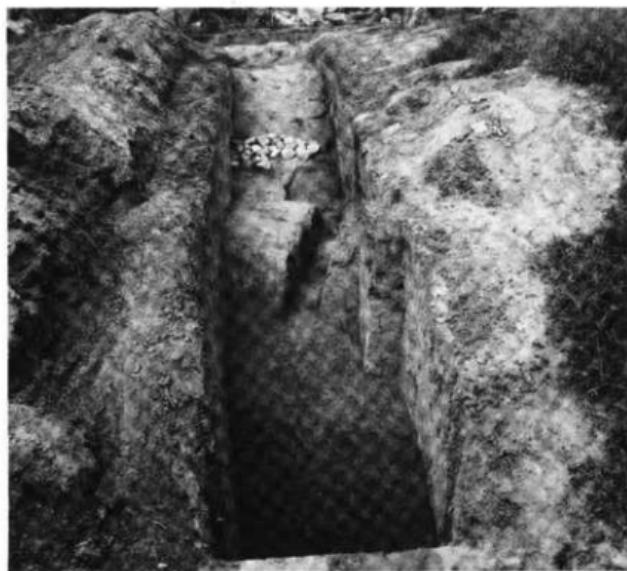
(1) 前方部南西コーナートレンチ葺石・円筒埴輪列（西から）



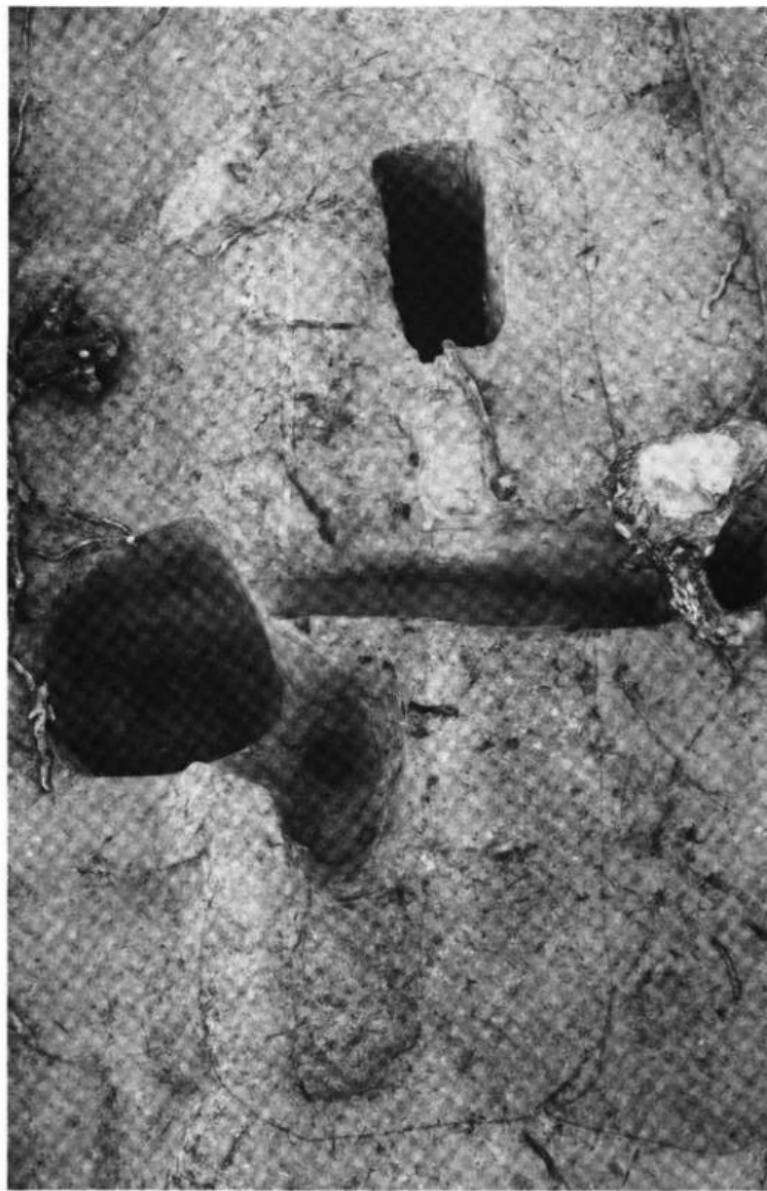
(2) 前方部南西コーナートレンチ葺石



(1) 前方部南西コーナートレンチ葺石



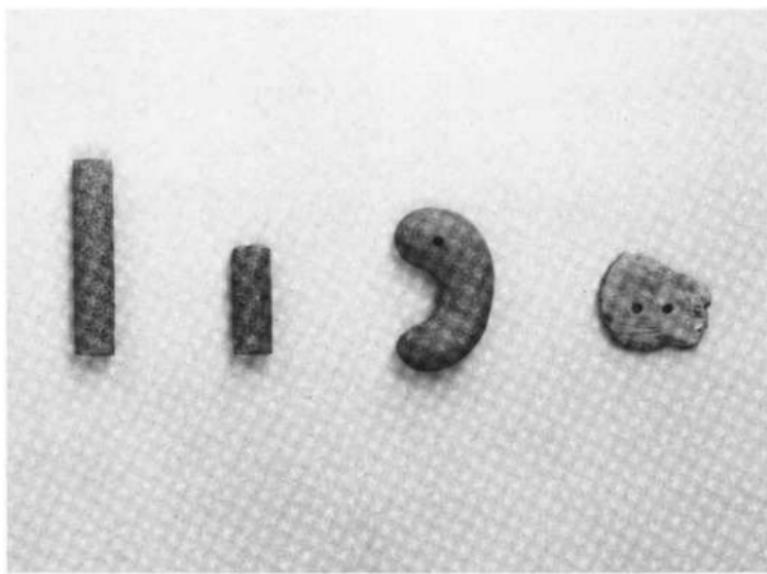
(2) 前方部南トレンチ（南から）



主体部検出状況



(1) 後円部西トレンチH-1



(2) 玉類・双孔円板



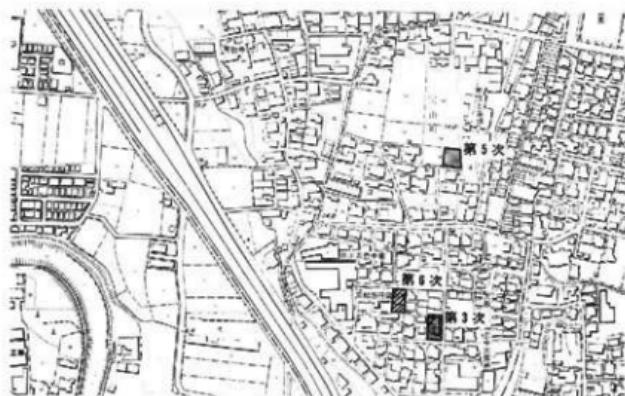
# 山ノ上遺跡第6次調査概要報告

## 例　　言

1. 本書は豊中市宝山町19番地において実施した個人住宅建築工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は昭和60年11月18日から同年11月30日にかけて実施した。
3. 発掘調査は、本市教育委員会教育部社会教育課文化係が実施し、山元建が現地を担当した。
4. 本書の執筆は、山元が担当した。
5. 土地所有者長久豊氏には、建築確認時のお願いであったが、快諾していただいた事に対し感謝いたします。また、隣接地の土地所有者伊地知季彦氏には写真撮影の際御協力を得たことに感謝いたします。

## 目　　次

I.はじめに	35
II.調査の概要	35
III.出土遺物	38
IV.まとめ	41



第1図 調査地点位置図 ( $S = 1/5000$ )

## I. はじめに

調査地点は、豊中市宝山町19番地に位置し個人住宅の建替えに伴ない、重機による試掘を行なったところ第2図に示した上師器等が出土し、昭和60年11月18日より、30日まで発掘調査を実施した。



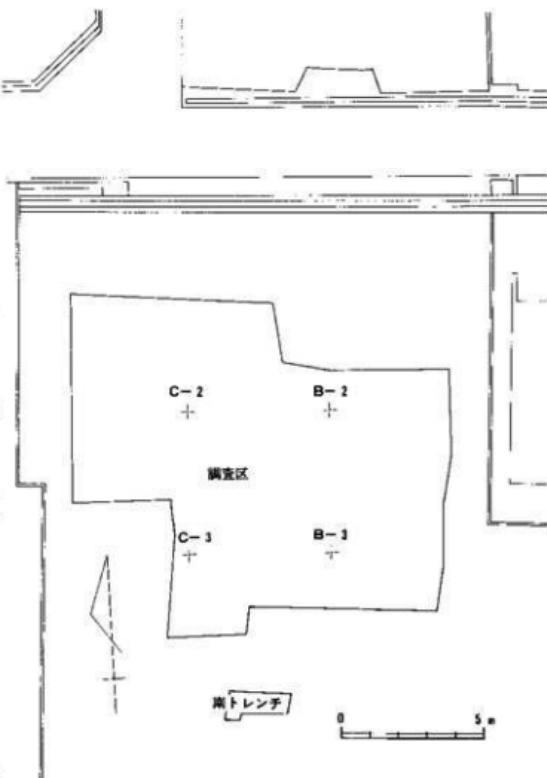
第2図 立会時出土遺物

## II. 調査の概要

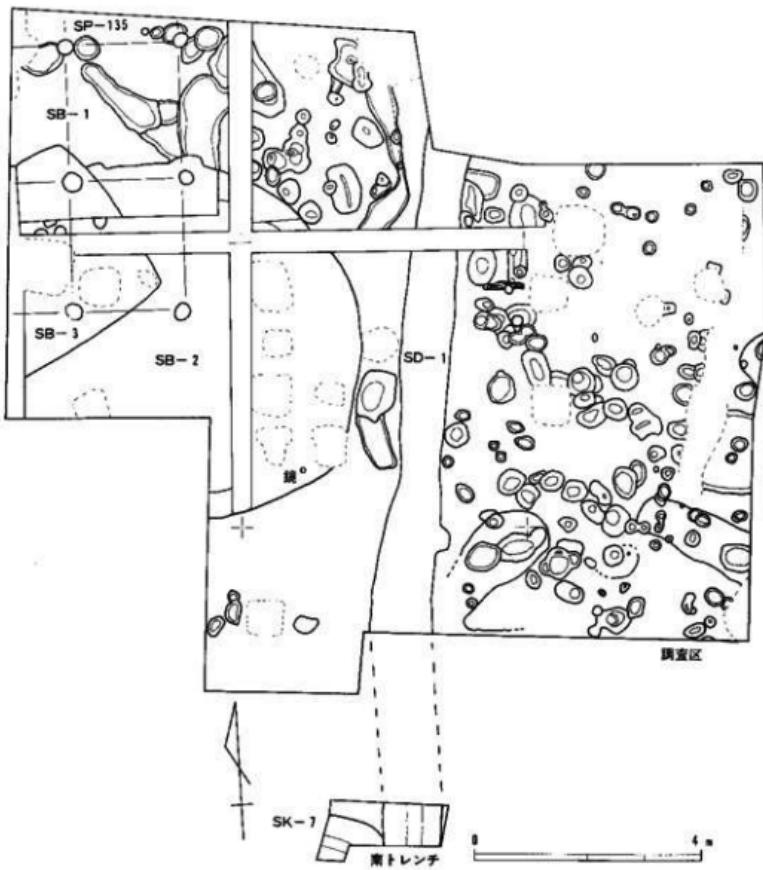
遺構の本来の層位は表土・平安時代築地層・弥生時代～古墳時代造物包含層・地山と続くと考えられるが、築地層と包含層の残るのは調査区の北西部のみで、他の部分では厚さ20cmの表土直下の地山面に遺構が切り込まれた状態であった。

今回の調査では、弥生時代前期の土塙、溝、同後期(?)の竪穴住居、古墳時代の竪穴住居、平安時代の掘立柱建物等の遺構を検出した。主要な遺構を以下に記述する。

S K - 7 (第5図、図版2) 南トレンチの西部で検出した土塙で完掘してていないため全容は明らかにしがたいが、南北約0.9m深さ約0.40mの東西に長い土塙のようである。埋土は大きく2層に分かれ、上層より弥生前期の土器を一括して検出した。



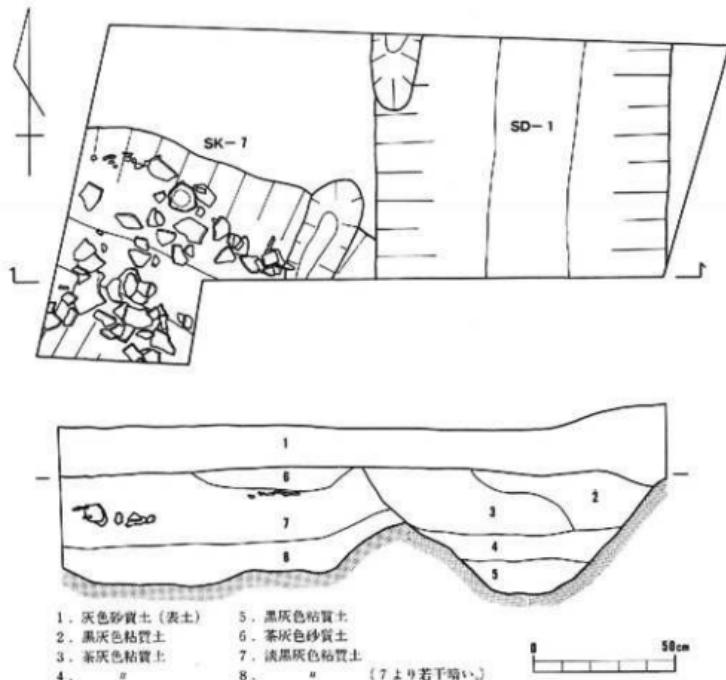
第3図 調査範囲図



第4図 造構全体図

**SD-1** (図版1、図版2) 調査区中央を南北に走る弥生時代前期の溝で、幅0.8m~1.0m、長さ12.8mを計る。調査区は掘下げなかったが、南トレンチの断面観察によると、深さ0.45mを測る。埋土は大きく4層に分かれ、各層より少量の遺物が出土している。SK-7を切っているが、両者には殆ど時期差はないようである。

**SB-2** (図版1) 調査区の西部で確認した円形の堅穴住居で、直径6.8m程になるとされる。レベルが埴物の基礎以下になるため、掘下げなかったが、トレンチの断面観察の結果から、厚さ10cm程の貼床を行ない、周溝（北東部で2条、南部で1条）が認められた。なお、



第5図 SD-1、SK-1平面図・断面図（南トレンチ）

埋土中より小形彷彿鏡（第7図、図版2・3）1面が背面を上にして出土した。当住居跡の時期は明確にしがたいが、弥生時代後期の可能性が強い。

SB-3、調査終了直前に確認した一辺3mの堅穴住居でSB-2を切っている。SB-2同様掘下げていないため、詳細は不明であるが、トレンチの断面観察によると、浅い周溝があがるようである。時期はその平面より古墳時代に下ると考えられる。

SB-1 調査区北西部で検出した掘立柱建物で、SB-2・3が完全に埋まってから建造されている。確認し得たのは2×1間分であるが調査区外に伸びるものと考えられる。柱間は南北2.4m、東西2.0mを測り、各柱穴は円形で深さ約40cmを測る。この建物は上層の12世紀前半と考えられる整地層の直下で検出したもので、建物の時期もその頃の可能性が強い。

また、調査区の東部では多くの柱穴と思われるビットが切り合って存在している。明確に並ぶものはなかったが、建造物が存在したことは間違いない。これらの柱穴の時期は明確にし得ないが、土師器を検出したビットがある一方、柱穴の掘り方埋土より須恵器を1片も検出しな

かったことから、古墳時代前半の時期が考えられよう。

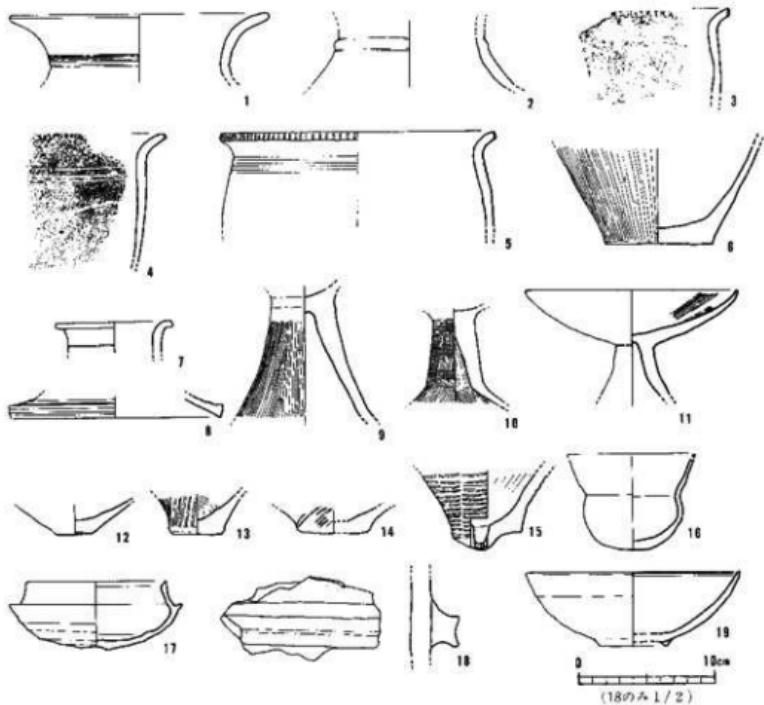
### III. 出土遺物

今回出土した遺物は弥生時代、古墳時代および中世の土器類、そして小形彷彿鏡である。

第2図は立会調査時に出土した土師器の甕の体部上半～口縁部である。球形の体部から短かく開く口縁部が続き、端部は内方につまみ上げ、丸く終わる。淡赤褐色～淡黄褐色を呈し、外面とも黒く変色する。口縁部はヨコナデの後、内面にハケを施し、体部は外面の一部にハケが見られ、内面はヘラケズリを施す。胎土に径1mm程のチャートをまばらに含む。

**S K - 7 出土遺物** (第6図1～6) 甕と甌が出土し、何点かを抽出して報告する。1は甕の口縁部で口徑19.0cmを測る。黄褐色を呈し、ヨコナデ調整後、頸部に3条の沈線を施す。胎土は径1～2mmのチャート、長石等を多く含む。2は甕の頭部で、黄褐色を呈し、1条の削り出し突帯を巡らす。胎土にチャート、長石を非常に多く含む。3～5は甕の体部上半～口縁部である。3は殆ど胴の張らない体部に短かい口縁部の続るもので、口縁端面に刻み目に巡らす。体部内外面は指ナデ、口縁部はヨコナデを施す。4も胴の張らない体部に短かく反傾する口縁部が続く。頸部に3条の沈線、口縁部に刻み目を各々巡らす。黄褐色を呈し、胎土はチャート、長石を非常に多く含む。5はやや胴の張る体部に短かい口縁部が続く。口縁部径は20.5cmを測り、頸部に3条の沈線、口縁部に刻み目を各々巡らす。体部内外面はナデ、口縁部はヨコナデを各々施す。淡赤褐色を呈し、胎土には径1～2mm程のチャート、長石をやや多く含む。6は、甕の底部である。平底で直線的に体部に続く。外面赤褐色、内面茶褐色を呈し、外面ヘラミガキ、内面指ナデを施す。胎土には径1～2mmのチャート等を多く含む。S K - 7 出土遺物は、沈線3条のものが多く、削り出し突帯がみられることなどから畿内第1様式中段階の一括資料とみなしえる。

(1)  
**包含層、SB-2・3埋土、SP-135 出土遺物** (第6図7～16) 包含層とSB-2・3の埋土はともに黒灰色を呈し識別が難しく、層位的に分けることは不可能であったので今回は一括して報告する。遺物は弥生時代前期から古墳時代に及ぶ。なお、13のみSP-135出土遺物である。7は弥生時代前期の小形の甕と考えられ、頸部に1条の沈線を施す。暗茶褐色を呈し、雲母、角閃石を多量に含む生駒西麓産の胎土である。8は弥生時代中期後半の高杯等の脚部と考えられ、外面に凹線文を施し、端部径8cmである。外面淡黒褐色、内面淡茶褐色を呈し、胎土には径1mm以下のチャートをまばらに含む。9～11は弥生時代後期の高杯である。9はなだらかに開く脚部で外面にヘラミガキを施す。淡黄褐色を呈し、胎土には径0.5mm以下のチャート等をまばらに含む。10も脚部で、直線的にのびる脚柱部から屈曲して裾部が開く形式のものである。外面は茶褐色を呈し、タテ方向のヘラミガキの後、暗文状の沈線を3～5条を1単位として3帯施す。内面は黄褐色を呈し、裾部にハケを施し、脚柱部にしばり目が残る。胎土には



第6図 出土遺物実測図

極めて微細なチャート・クサリ礫をまばらに含む。11(図版3)は浅い楕円の杯部になだらかに開く脚部が続くもので口縁部径15.6cmを測る。口縁端部は若干つまみ上げ状を呈する。表面は摩滅が激しいが、杯部の内面、脚部外面にはヘラミガキが認められる。黄褐色を呈し、胎土はチャート・長石をまばらに含む。12~15は甕の底部である。12は丸底に近く、赤褐色を呈し、胎土には砂粒を殆ど含まない。13は平底で外面にタタキ、内面にハケを施す。淡赤褐色を呈し、胎土にはチャート・長石をまばらに含む。14は赤褐色を呈し、外面に右上がりのタタキを施す。胎土には径1mm程のチャートをまばらに含む。15は底面に内部から穿孔し、外面は水平方向のタタキ、内面は粗いハケを施す。黄褐色を呈し、胎土には径1mm弱のチャート・長石をやや多く含む。なお、穿孔のため底部は大きく突出している。16は小形丸底甕である。口縁端部は一部欠けるが直径9.6cm、高さ7.2cm程になると想られる。なお、この土器はSB-2の埋土上面から掘り込まれたピットより出土している。

須恵器 17は調査終了直後、A-1区の調査区北壁附近より重機により掘り出されたほぼ完

形の杯身である。淡灰色を呈し、受部、立上がり部ともその端部はシャープさに欠ける。底部内面に同心円文の痕跡を残し、外面には右回りのヘラケズリが5回転分認められる。陶色編年のI型式5段階頃に位置付けられよう。

(2)

埴輪 18はB-2区のSD-1上面で検出した円筒埴輪のタガの部分と考えられ、現存長5.9cmを測る。内面は淡赤褐色を呈するが、外面を中心にして灰色に変色する。胎土には、径1mm程のチャート・長石・クサリ礫を含み、特にチャートが目立つ。焼成は良好で硬質である。また、タガは下方に突出し、端面は若干凹む。細片であるため断定的なことは言えないが大石塚古墳の円筒埴輪に似た印象を受ける。

(3)

瓦器 19はC-1区の整地層より出土した楕で復元すると口径16cm程になるとされる。高台は断面三角形を呈し、端部内面に1条の沈線が巡る。いわゆる柿葉型で12世紀前半頃のものであろう。

(4)

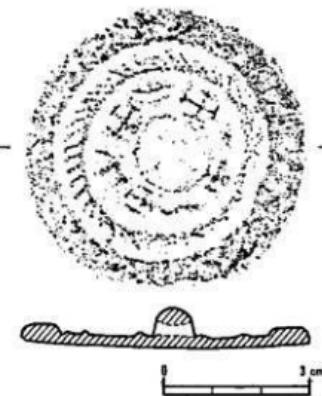
小形彷製鏡（第7図、図版2・3） SB-2の埋土と考えられる黄色土混りの淡黒灰色粘質土の上面で、背面を上にした状態で出土した。平縁の端面を中心に腐蝕が激しいが、直径6.1cm、外縁部幅0.8~0.9cm、同厚さ0.4cmを測り、若干鏡背面側に反る。外縁内側に左回りの櫛齒文帯、圓文帯、円鉢座、円鉢と続く。櫛齒文帯、圓文帯間および円鉢座・円鉢間に各々突線を1条巡らし、円鉢には1孔を穿つ。圓文帯は四方に「ヰ」形の文様を配し、その間に左回りで「一」「山」「の」形の文様が観察できるが、残りの一つは判然としない。なお、櫛齒文帯の一部を中心に赤色顔料が見られる。圓文帯および円座の一部にも認められるため、おそらく当初は少なくとも櫛齒文帯～円鉢座の全面に塗布されていたのである。鏡の時期については明確な根拠を欠くものの、鏡と同一面上より出土した土器（第6図11・15 図版3）がともに畿内第V様式の特徴を示し、鏡の廃棄時期もその頃の可能性が強い。

註(1)『弥生式土器集成』木編2（東京堂出版 1968）

(2)大阪府教育委員会『陶器』III（大阪府文化財調査報告書 第30輯 1978）

(3)豊中市教育委員会『史跡大石塚、小石塚古墳』（1980）

(4)高槻市教育委員会『上牧遺跡発掘調査報告書』（1980）



第7図 小形彷製鏡拓影図

## IV. まとめ

山ノ上遺跡第6次調査の概要を記してきたが、以前の調査の成果とともに現在までの知見を述べてみることにする。

山ノ上遺跡の始まりは弥生時代前期に遡る。今回の調査で検出したSD-1と3次調査のSD-1は37mを隔てて南北に平行して走り、今後住居跡等を検出する可能性も十分ある。なお、3次調査のSD-1では縄文時代晚期の土器も出土しており、西標における弥生文化の始まりを考える上で重要である。

弥生時代中期は第1次調査で比較的多くの遺物が出土しているものの判然としない点が多い。<sup>(1)</sup>しかし、集落が存在したことは確実で平野部の勝部遺跡、箕輪遺跡あるいはこの時期に大規模な集落の形成される北方の新免遺跡との関係が注目される。

弥生時代後期は今回の調査で検出したSB-2にその可能性が考えられる以外は明確な遺構を検出しておらず、詳細は不明としか言いようがない。しかし、今回後期の可能性が高い小形仿製鏡が出土した。この鏡は高倉洋彰氏の言われる重圓文日光鏡系小形仿製鏡第III型b類に分類できるものである。<sup>(2)</sup>

次の古墳時代になると、1・3・5次調査、そして今回の調査で住居跡を確認し、活発な人々の生活が窺える。なお、前述したように今回円筒埴輪片が出土しており、わずか1片であるため断定的なことは言えないものの、消滅した古墳の存在も考慮する必要が出てきた。

また、今回平安時代後期（12世紀前半）と考えられる掘立柱建物1棟を検出し、1次調査で検出した寺院跡とはほぼ時期的に平行し、両者の関係が注目される。<sup>(3)</sup>

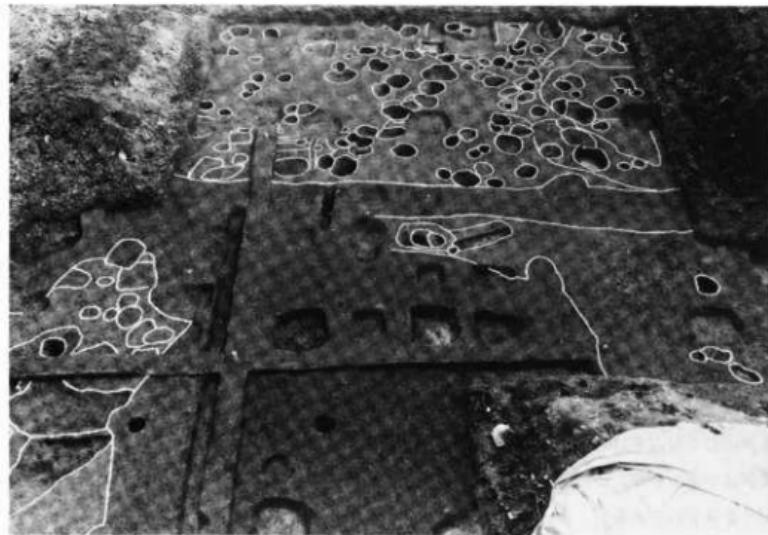
このように、山ノ上遺跡は弥生時代～平安時代のほぼ全時期にわたって集落あるいは寺院などが認められ、近接する遺跡ともども重要視していく必要があろう。

註(1)呉市教育委員会『呉市埋蔵文化財発掘調査概要』1982年度（1983年3月）

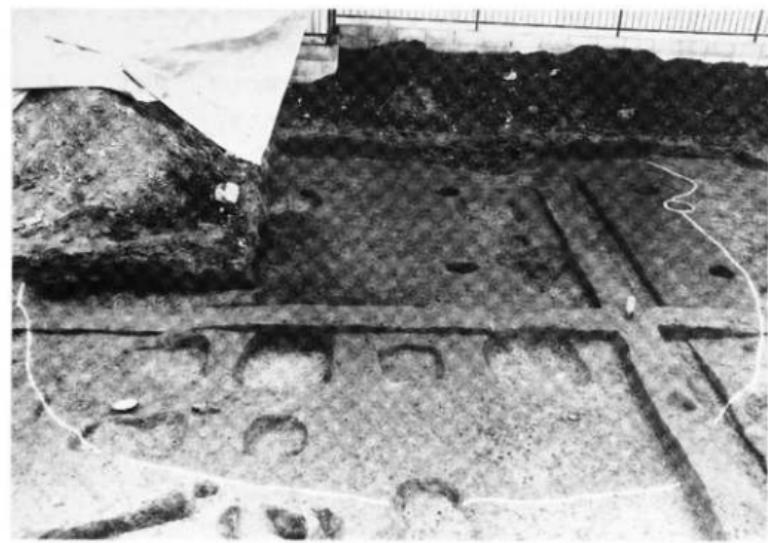
(2)高倉洋彰「弥生時代小形仿製鏡について」（『考古学雑誌』第58巻第3号 1972年）

同 「弥生時代小形仿製鏡について（承前）」（『同』第70巻第3号 1985年）

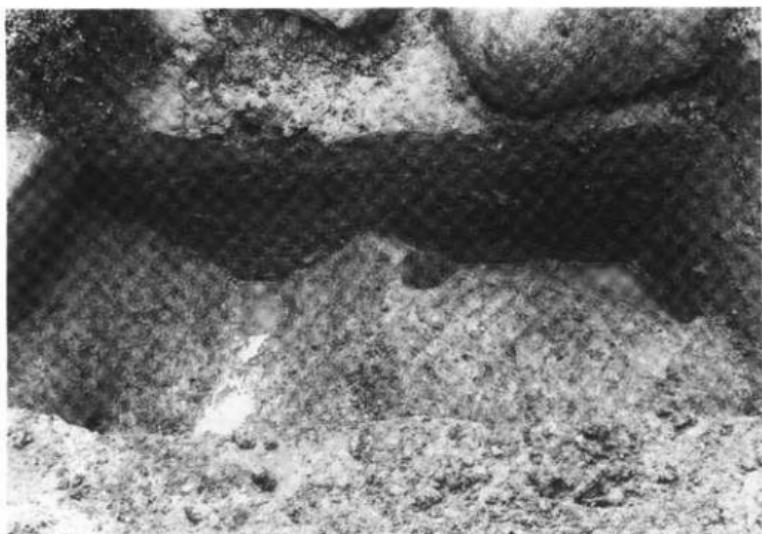
(3)→註(1)



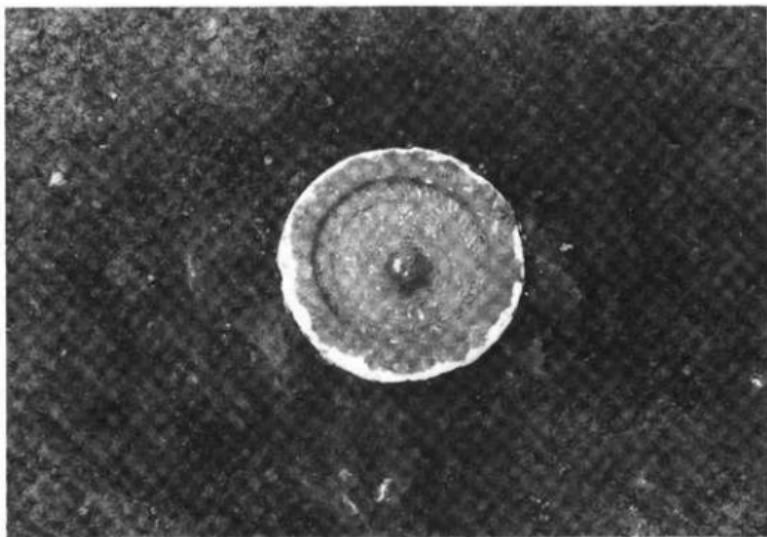
(1) 造構全体図（西より）



(2) SB-2（東より）



(1) SD-1・SK-7 (北より)



(2) 小形仿製鏡出土状況



(1) 高 杯



(2) 甕



(3) 小形仿製鏡

# 新免遺跡第13・14次発掘調査概要報告

## 例　　言

1. 本書は、豊中市玉井町3丁目53番地外3筆（第13次調査地点）、同町2丁目144、144-2、144-3（第14次調査地点）の二箇所において実施した個人住宅建築工事に伴う発掘調査の概要報告書である。

2. 発掘調査期間及び調査面積は以下のとおりである。

○第13次調査地点 昭和60年9月9日～9月25日 96m<sup>2</sup>

○第14次調査地点 昭和60年10月11日～11月6日 170m<sup>2</sup>

3. 発掘調査は本市教育委員会社会教育部社会教育課文化係が実施し、田上雅則が現地を担当した。

4. 本書の編集、及び執筆は田上が行なった。

5. 上地所有者中野千代治氏、渡辺　祥氏には、調査の実施に際し、多大なる御理解をいただいた事を記し、深く感謝いたします。

## 目　　次

I.はじめ	47
II.遺跡とその周辺	47
III.第13次調査地点	49
1. 調査の概要	49
2. 出土遺物	55
IV.第14次調査地点	56
1. 調査の概要	56
2. 出土遺物	63
V.まとめ	64

## I. はじめに

新免遺跡は、阪急豊中駅の西方一帯に広がる弥生時代～古墳時代を中心とする遺跡である。この地域は古くから住宅地となり、近年建替え及び新築が多くなっている。本遺跡は台地上に立地しているため遺構面まで非常に浅く、木造住宅の基礎工事でも十分破壊される危険性をもつ。

今回の報告はこうした状況の中で、豊中市玉井町3丁目53番地外3筆（13次調査地点）、玉井町2丁目144、144-2、144-3（14次調査地点）の二箇所において実施した昭和60年度の緊急発掘調査の概要報告である。

## II. 遺跡とその周辺

新免遺跡は、豊中市玉井町一帯に広がる弥生時代より近世に至る複合遺跡である。

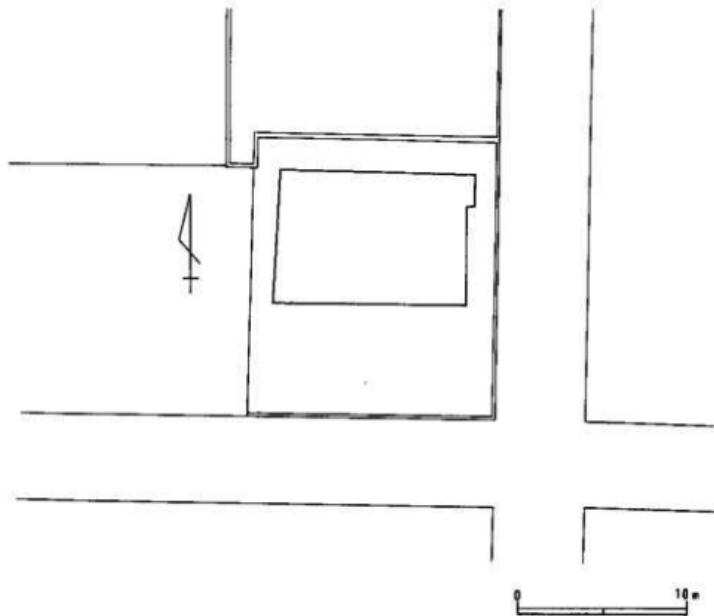
本遺跡の存在は古くから確認され、昭和10年頃に弥生時代後期から江戸時代に亘る土器が出土し、また古墳時代前期に比定される新免上佃古墳が所在していたことが豊中市史に記載され周知の遺跡として注目してきた。玉井町一帯は戦前より住宅地となり、近年宅地建替え及び新築が活発化し、これに伴う発掘調査の実施により古墳時代後期の須恵器が豊富に出土し、また本遺跡が弥生時代中期にまで遡る遺跡であることが判明している。



第1図 調査地点位置図

新免遺跡は千里丘陵から派生する通称豊中台地の一支丘陵西側先端部、標高20~22mにあたり、北摂山地に源を発する千里川が東北方向より流れ出て南方向に流れを変える東岸に位置し北側及び西側を千里川によって画された地形を呈する。平野部との比高差は約5mを測り、水利に恵まれた場所を選地している。

この丘陵を含む豊中台地は標高133mの島熊山を頂点とし、南方の大坂湾方向に舌状に緩傾斜する台地であり、猪名川によって形成された沖積平野を眺望できる台地西側縁辺部に遺跡が濃厚に分布している。特に弥生時代、古墳時代を中心とする遺跡が多く含まれ、弥生時代から古墳時代の住居址・埋葬施設が検出された宮ノ前遺跡、桜井谷古窯址群で生産された須恵器出荷中繼地と考えられる本町遺跡、弥生時代前期より営まれている山ノ上遺跡、また前期古墳と考えられる御神山古墳や中期古墳を中心とする桜塚古墳群がある。一方、西方の沖積平野部にも弥生時代を中心とする多くの遺跡が分布し、木棺墓や銅劍の鋳型が出土した田能遺跡や8基の木棺墓が検出された勝部遺跡、更に南方には弥生土器編年の型式名となった穂積遺跡や庄内遺跡があり、学界でも著名な遺跡が見られる。

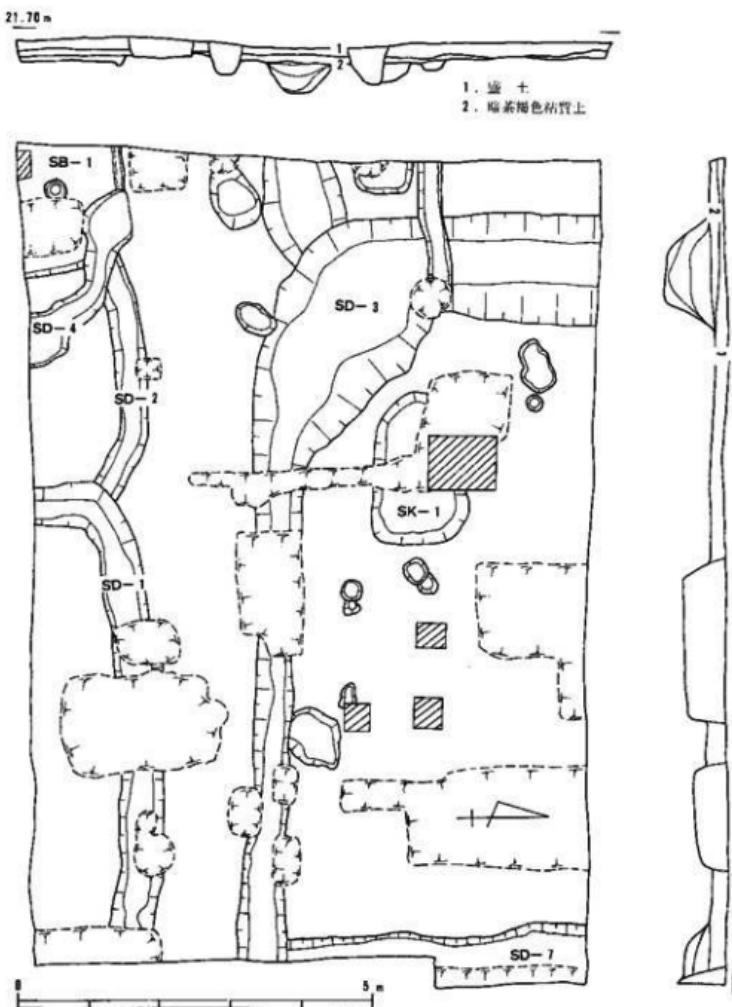


第2図 調査範囲図

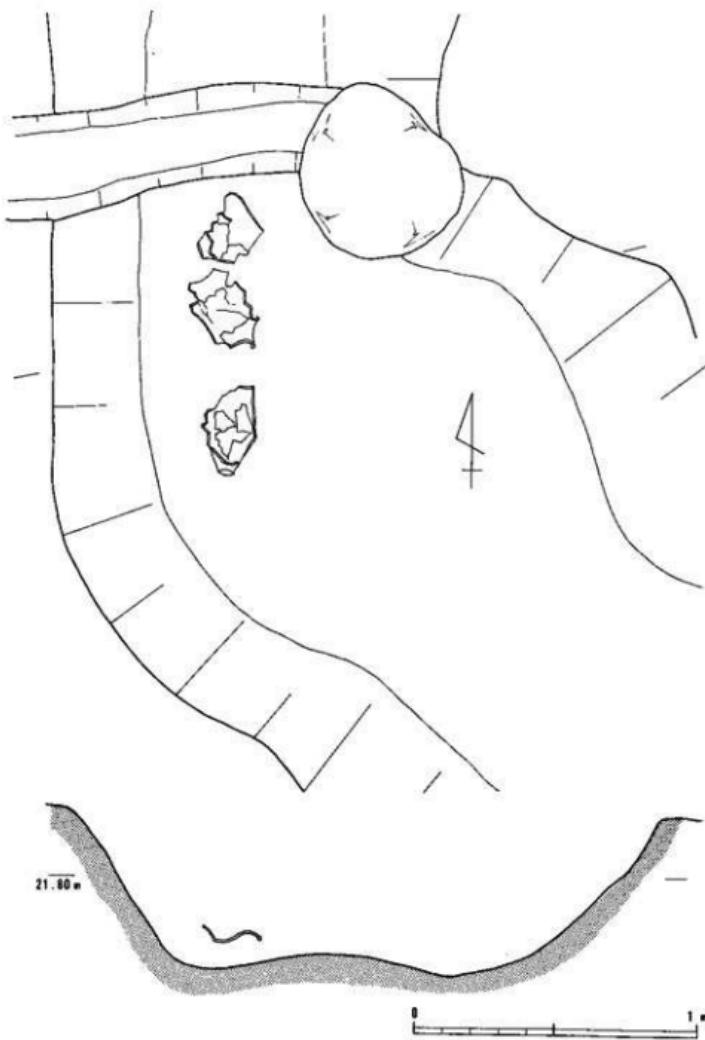
### III. 第13次調査地点

#### 1. 調査の概要

調査地点は、豊中市玉井町3丁目53番地外3筆に所在する。調査は敷地の範囲内に2m×12



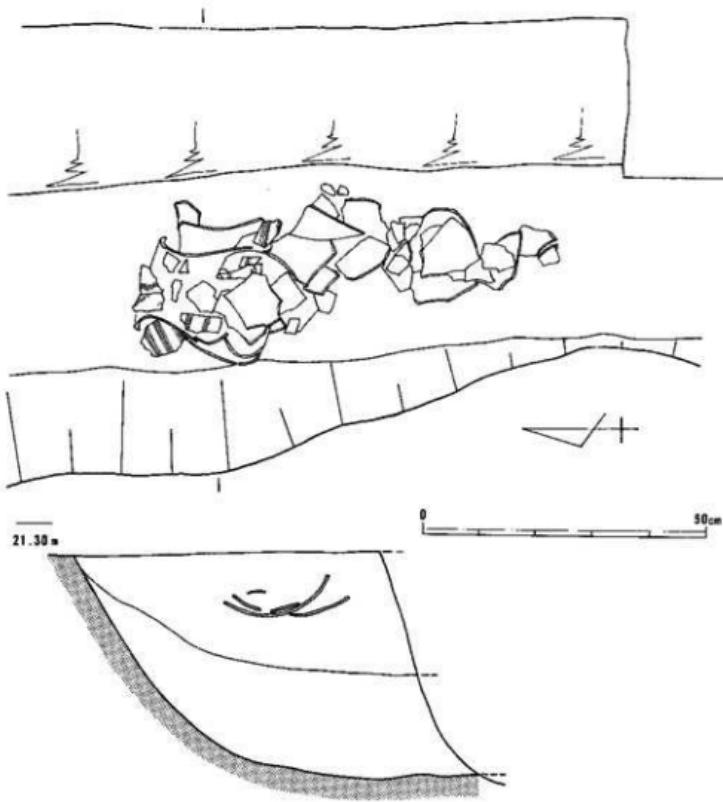
第3図 検出造構全体図



第4図 SD-3層曲部土器群出土状況実測図

mのトレンチを一本設定し遺構を確認した上で、建築予定地内全域を拡張することにした。調査面積は96m<sup>2</sup>を測る。

基本層序は3層からなり、第1層は表上、第2層は暗茶褐色粘質土の包含層で調査区西半分に約12cm残存していた。第3層は地山となり、遺構はこの面において検出した。

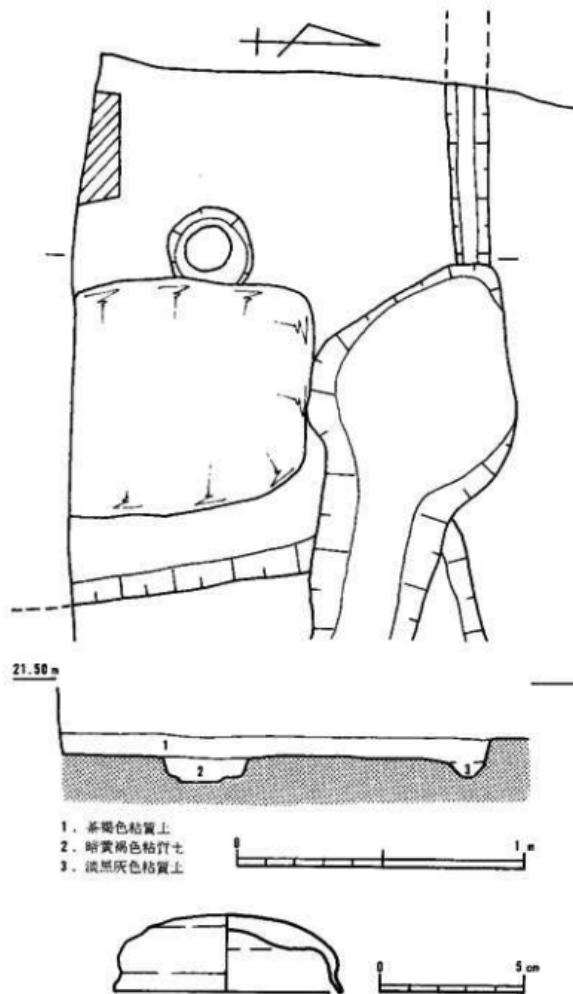


第5図 SD-7 上層土器群出土状態実測図

検出した遺構は溝、住居址、ピット等で、弥生時代、古墳時代の両時期の遺構が混在している。恐らく弥生時代の遺構が埋没した後に古墳時代に削平され、古墳時代以降の遺物を含む事より包含層は削平後に堆積したものと考えられる。以下、検出遺構について概述する。

**SD-1** 調査区南側を東西に走行し、屈曲して南方向に延びる溝である。溝の断面形態はU字形を呈し、幅60~65cm、深さ20~25cmを測る浅いものである。出土遺物は皆無であるが、後述するSD-3と平行しているため、これと同時期であると思われる。

**SD-2** 調査区西南隅で検出した東西に走向する溝である。幅40cm、深さ20cmの浅いもので、東側をSD-1に、西側をSD-5によって切られている。出土遺物はなく時期は不明で



第6図 SB-1 及び出土物実測図

ある。

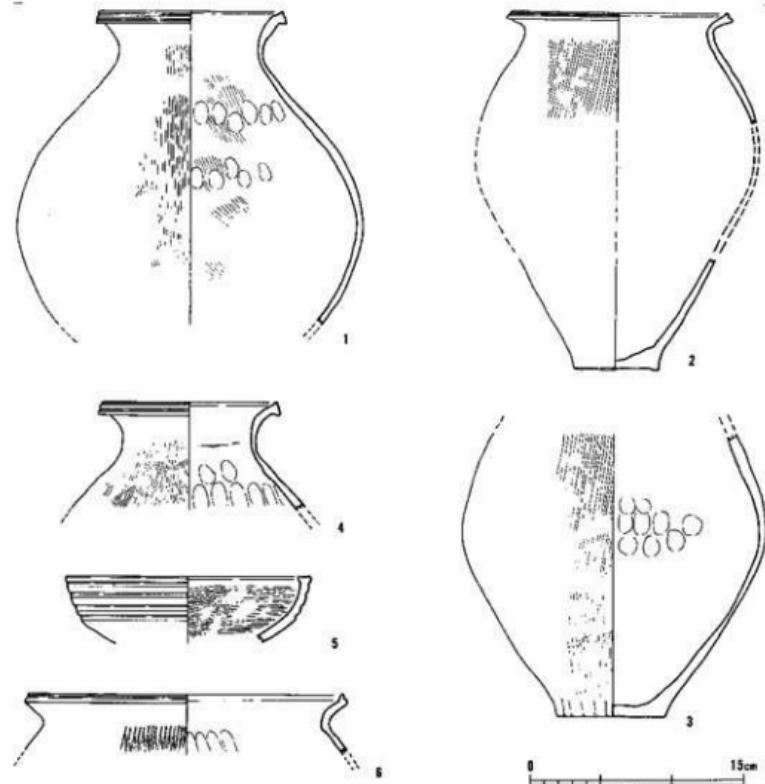
**SD-3 調査区中央**を東西に走行し、北方向にはほぼ直角に屈曲する溝である。東西に走向する部位では断面形態はU字形を呈し、幅50~80cm、深さ20~56cmを測るが、屈曲部に向って徐々に数値を増して屈曲部では最大値を示し、幅2.3m、深さも60cmとなる。北方向に走向する部位では断面形態は逆台形を呈し、幅1.3m~1.5m、深さは65~70cmを測る。溝底面は凹凸の著しいもので、流路としての機能は考えられない。溝内堆積埋土は東西に走向する部位では黒褐色粘質土1層であるが、北方向に走向する部位では3層に分かれ、下層より暗黃褐色粘質土、黒灰色粘質土、黒褐色粘質土となる。屈曲部

では上層の黒褐色粘土堆積以前に地山土が多量に混入しており、溝が若干埋没した段階で人为的に埋められたものと考えられる。尚、この部位のほぼ底面直上より弥生時代中期に比定される土器が三個体南北に並んで出土した。また埋土内からも多量の土器片が出土している。

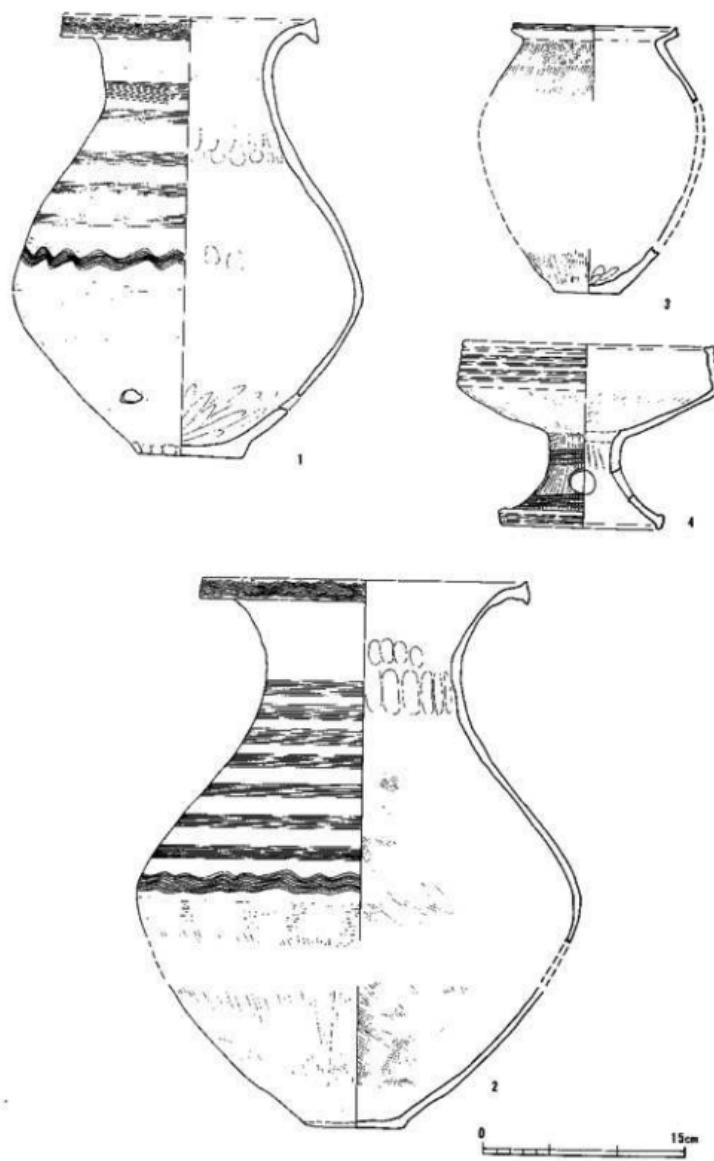
**SD-7 調査区東隅**において検出した南北に走向する溝である。南側でSD-3によって切られているが、更に南には認められないため、東方向に屈曲しているものと思われる。溝幅

を把握するため一部拡張を行なったが、後世の攪乱により詳らかにできなかった。深さは40cmで、断面形態はU字形になるようである。埋土は2層に分かれ、上層において弥生時代中期に比定される土器群を検出した。尚、下層埋土内においても弥生時代中期に比定される土器が出土している。

**SB-1** 調査区西南隅において一部分検出した。平面は方形プランを呈するものと考えられるが、SD-4によってコーナー部を切られているため、隅丸方形になる可能性もある。また遺構の大半は調査区外へ延びているため規模は不詳である。周壁の高さは床面から10cmを測り、やや上部を削平されているものと思われる。北辺には側溝が認められたが、東辺には存在していない。この側溝は幅13cm、深さは6cm、断面形態はU字形をなすものである。主柱穴は径30cm、床面からの深さは10cmを測るピットが1基認められ、位置的に見て4本柱になるもの



第7図 出土遺物実測図



第8図 出土遺物実測図

と考えられる。時期は主柱穴埋土内出土土器より古墳時代後期に比定される。

## 2. 出土遺物

本調査地点出土遺物の大半は弥生時代中期の土器が占めている。包含層からも遺物は出土しているが図化し得るものではなく掲載していない。

**SD-3 屢曲部土器群 (図7-1~3)** 北から甕(2)、壺(1)、壺(3)の順に出土し何れも小型の部類に属するものである。(1)は体部に装飾を施さない広口壺である。口縁端部は上下に拡張し、外面に二条の凹線を施す。調整は外側タテハケ、内面は斜め方向のハケである。(2)はやや胴が張り底部の窄まる形態を有する。口縁端部は上部にややつまみ上げて拡張し、外面に一条の凹線を施す。調整は外側タテハケ、内面はナデである。(3)は体部以下残存しているのみで、口縁部の形態は不明である。恐らく広口壺になると思われる。外面はタテハケ、内面はナデ調整である。

**SD-3 埋土内出土遺物 (図7-4~6)** 主に埋土上層より出土し、ここに掲げたものはその内で図示し得るものである。(4)は小型の広口壺である。口縁端部は上下に拡張し、外面に二条の凹線を施す。調整は外側タテハケの後ナデを行ない、内面は指頭圧痕が顕著が残る。(5)は直立する口縁外面に凹線を四条巡らす高杯杯部である。調整は外側風化のため不明であるが、内面はハケを施した後に横方向のヘラミガキを施している。(6)は推定口径23cmの中型甕で<sup>々</sup>く。字状の口縁部をもつ。口縁端部は上方につまみ上げ、外面に一条の凹線を有する。調整は外側に粗いタテハケ、内面はナデを施す。

**SD-7 上層出土遺物 (図8-1~3)** (1)は広口壺で口径は19cmを測る。口縁端部は上下に拡張するが、下方により強く垂下する。口縁外面には櫛描波状文を施す。頭部から体部にかけて五条の櫛描波状文を施す。胸部下半には焼成後の穿孔が認められる。外面調整は体部最大径を示す位置がヨコ方向のハケで、それ以外はタテ方向のハケが行われているが、頸部から体部にはタテ及び斜め方向に細かく施している。内面は風化のため不明であるが、頸部付近に指頭圧痕が認められる。(2)は推定口径24.4cmを測る大型の広口壺である。口縁端部は上下に拡張し、外面に2回の櫛描波状文を行う。頭部より体部にかけて七条の櫛描直線文と一条の櫛描波状文が認められる。外面調整は基本的に(1)と同じである。内面は斜め方向のハケが行われている。(3)は小型の甕である。口縁は<sup>々</sup>く。字状に外反し端部は上方につまみ上げ外面に凹線を巡らす。調整は外側タテハケ、内面はナデである。

**SD-7 下層出土遺物 (図8-4)** ほぼ完形に復元できた台付鉢である。口縁部外面は五条の凹線を巡らし、台部外面は四方向のスカシを穿ち、この上に各々四条のヘラ描沈線文を施す。

## IV. 第14次調査地点

### 1. 調査の概要

調査地点は、玉井町2丁目144、144-2、144-3に所在する。調査は建築予定地内を対象とし遺構の状況に応じて若干拡張を行なったため調査面積は170m<sup>2</sup>を測る。

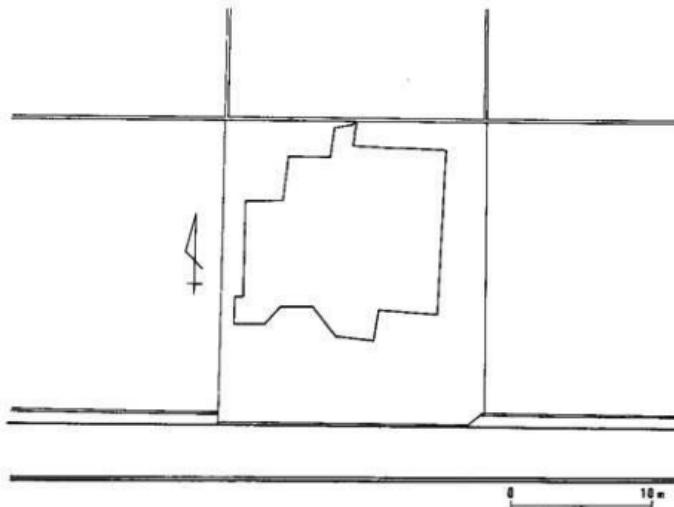
層序は、後世の削平がなされ、表土下は直接地山となり、遺構はこの地山面において検出した。

検出遺構は弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代後期の溝及びピットで、特に方形周溝墓の検出は第11、12次調査の成果と合わせ、集落と基城と関係を研究する上で、貴重な資料を提供するものと言える。

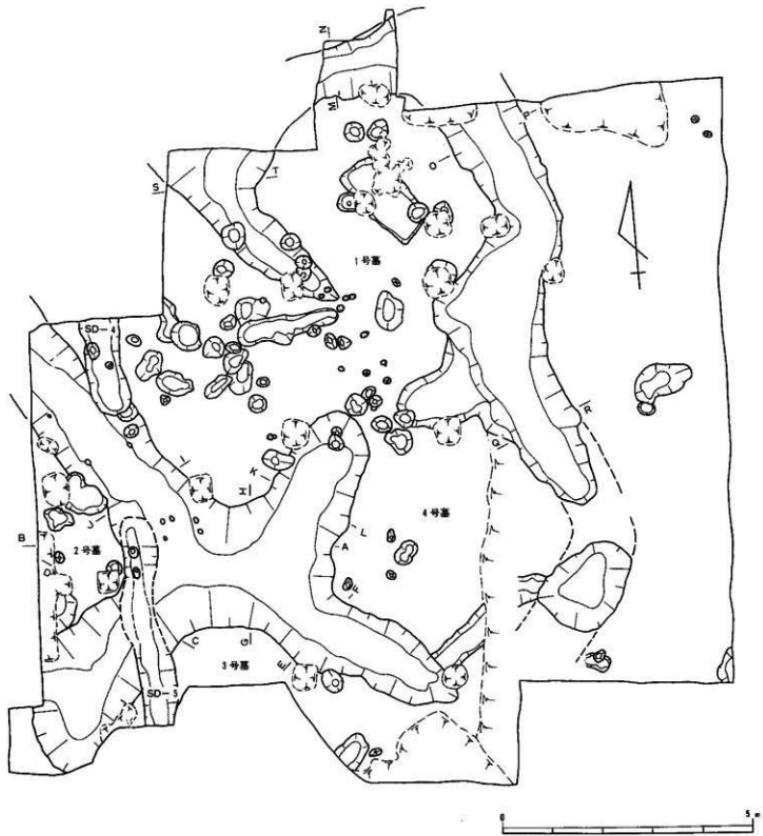
尚、調査区東半分は近世以降の畠作に伴う削平、盛土がなされており、遺構は著しく損傷を受けていた。

1号墓 調査区北側において検出したもので、北辺が調査区外に位置しており、規模及び平面形態を求めるため一部拡張を行なった。

墳丘部の平面形態はやや歪んだ長方形を呈し、長辺4.7m短辺3.5m、周溝最深部との比高差は56cmを測る非常に小規模なものである。盛土は認められず、後世の削平を受けている。



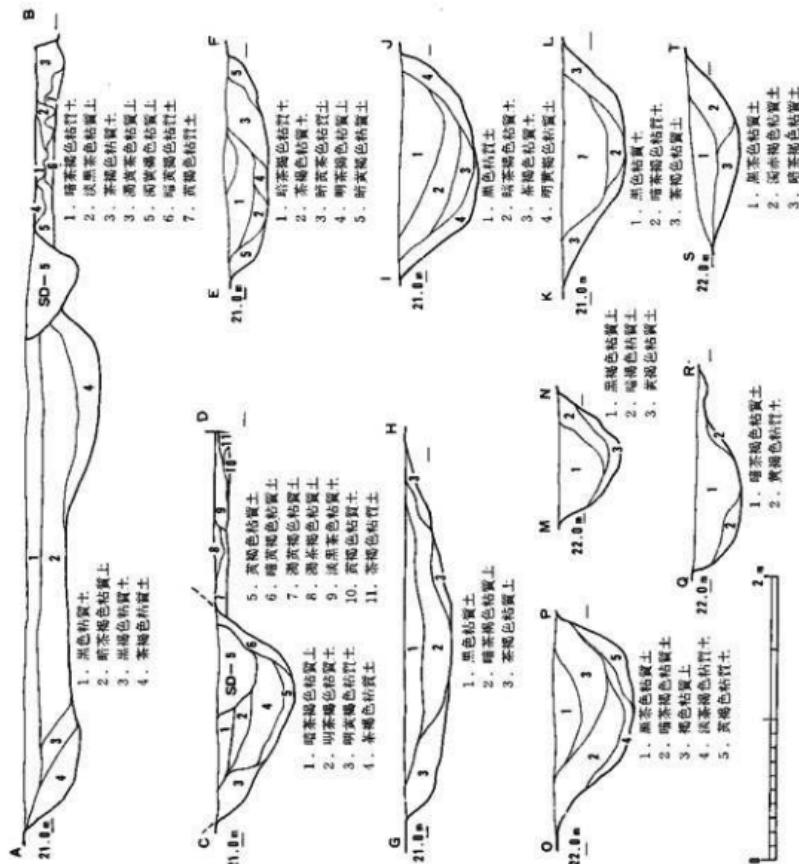
第9図 調査範囲図



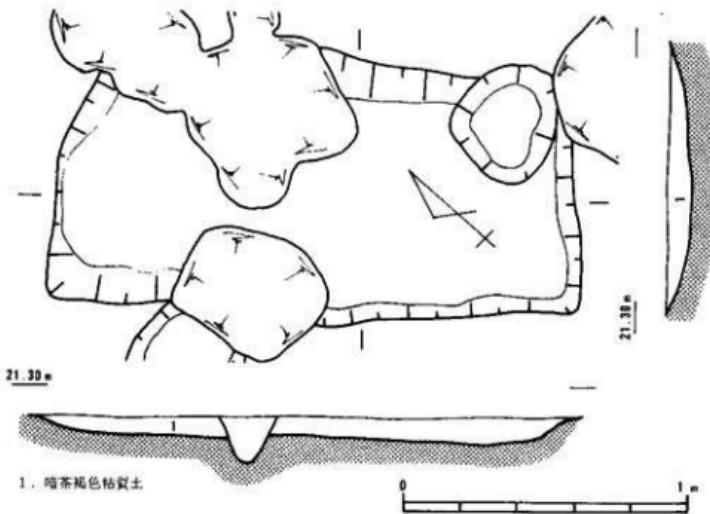
第10図 掘出遺構全体図

後述する2号墓との間に幅3.5m～4.0m程の空間部が存在している。周溝は東辺、北辺とも幅50cm前後であるが、西北部では幅90cmを示し、調査区外へも溝を共有する方形周溝墓の存在する可能性がある。周溝の断面形態はU字形を呈し、概して溝底面のレベル差は著しい。西南隅ではこの周溝は徐々に浅くなり、また東辺部の周溝も50cm西へ張り出し、幅1.9mの陸橋部を形成している。

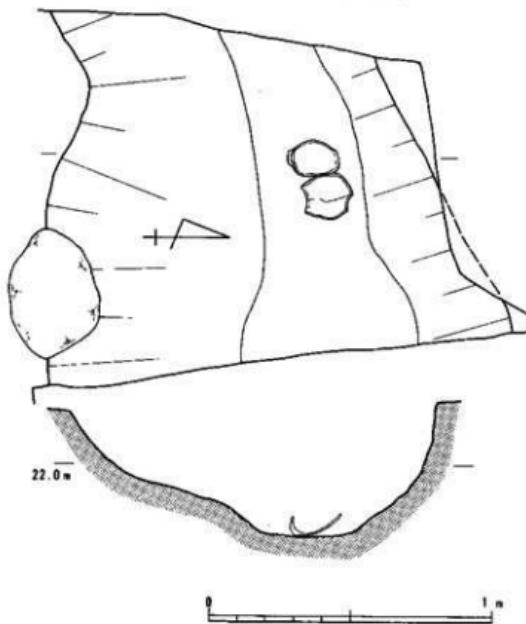
埋葬主体は墳丘部中央で一基のみ認められた。長辺1.8m、短辺80cmで、やや歪んだ長方形を



第11図 周溝内土層断面図



第12図 1号墓埋葬主体実測図



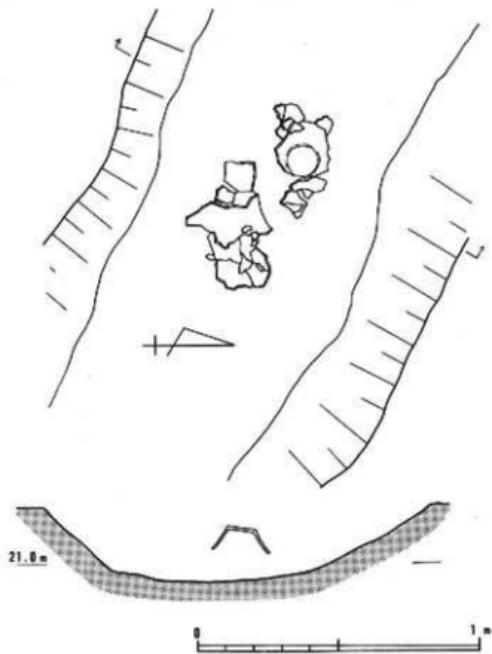
第13図 1号墓周溝内土器出土状態実測図

呈する。遺構検出面からの深さは10cm程度にすぎず、木棺の痕跡は認められなかったもののそれを否定する事はできない。

尚、拡張を行なった北辺周溝の底面直上より、弥生時代中期初頭に比定される無頸壺が出土している（第13図、図版4・5）。この土器は真二つに割れて互いに接し、各口縁部は逆方向を示す特異な出土状態であった。恐らく、周溝内で本来完形であったものがその後何らかの作用により破損したのではなく、予め二つに割り周溝内に置いたものと考えられる。

**2号墓** 調査区西側に位置し半分以上が調査区外へ延びるため規模は不明である。周溝は3号、4号墓と共有しており、西南部で漸次浅くなつて途切れ陸橋部を形成している。幅は1.5~1.3m、断面形態は緩いU字形を示し、周溝最深部より墳丘残存部までの比高差は55cmを測る。周溝内埋土は基本的には3層からなり、第1層淡黒色粘土、第2層暗茶褐色粘土、第3層茶褐色粘土である。このうち第2・3層には弥生土器が含まれていたが、第1層には多量に古墳時代中期~後期の遺物が含まれており、この時期までに周溝が部分的にこり窪地状になつていていた事を窺わせる。墳丘部には20cm程の盛土が残存しており、断面観察により墳丘中央部から縁部に向かって盛土作業の行なわれていたことが看取される。埋葬主体は認められず、1号墓と同様に墳丘中央部に設けられた可能性がある。東北辺周溝の底面直上より20cmの位置で弥生時代中期初頃に比定される土器が出土した。ほぼ完形に近いもので墳丘部に供獻されていたものが周溝内へ落ち込んだものと考えられる。

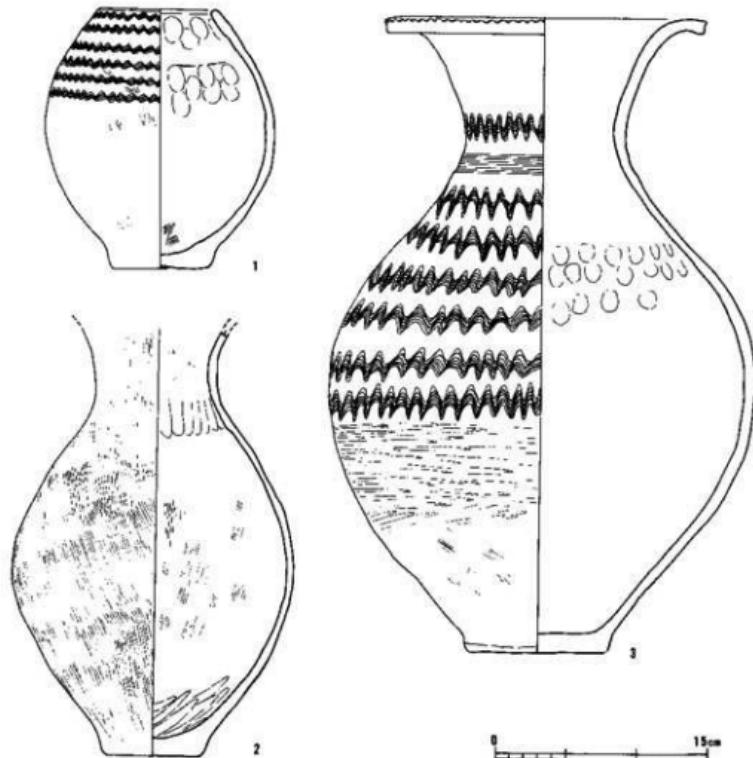
**3号墓** 調査区南隅に位置し2号墓と同様大半が調査区外へ延びるため規模は不明である。上述のように周溝は2号・4号墓と共有するもので、東西にそれぞれ陸橋をもつ。もっとも1号・2号・4号墓の位置的な関係をみると、周溝をはさんで対峙するものではなく、この3号墓と称したものは1号・2号墓の間にあ



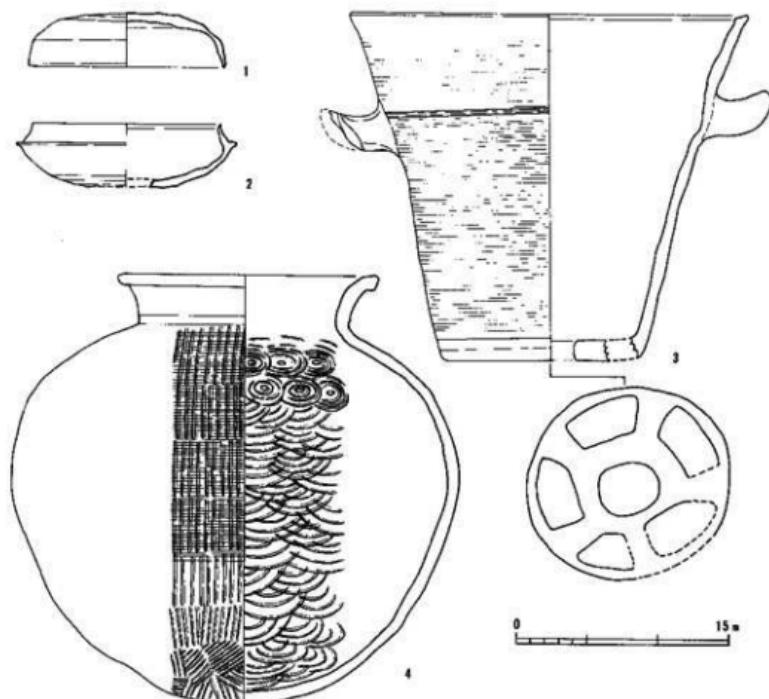
第14図 3号墓東北辺周溝内土器出土状態実測図

るものと同様の空間部分である可能性もある。しかし、調査区の南隅であり、また土置き場の関係で広く拡張することができず、現時点では方形周溝墓か否か断定し難い。

4号墓 調査区中央やや南に位置する。東半分は近世以降の削平により周溝は部分的しか残存していない。墳丘部は一辺4.5mの方形を呈するもので盛土は認められない。また埋葬主体は後世の削平によって失われているものと考えられる。周溝は西辺及び北辺の一部を2号・3号墓と同一の周溝によって区画し、東辺及び北辺の一部は1号墓の周溝が南下して区画している。南辺は部分的に残存しているが、東辺を区画する溝が更に延びているものと思われる。陸橋部は北辺中央及び南辺西よりに存在するが、特に北辺東側の周溝は1号墓東より南下する周溝より一段浅くなつて派生するもので、4号墓の造営時期は1号墓より下るものと考えられる。但し、1号墓より南下する部位の周溝内堆積土は基本的に同じであり、4号墓造営以前に予め掘削されていたものと思われる。



第15図 出土遺物実測図



第16図 出土遺物実測図

SD-5 調査区南西隅において検出した南北に走行する溝である。2号・3号墓を切っているが、遺構検出時には明らかにできず、断面観察によって確認した。幅は50~70cm、深さ30~50cm、断面は緩いU字形をなす。この溝の延長上に同一の方向に走向する溝SD-4が存在するが、途中で途切れしており同じ溝ではない。埋土内より古墳時代後期に比定される須恵器が出土している。

## 2. 出土遺物

**弥生土器**（第15図）（1）は1号墓北辺溝内出土の小形の無須壺である。体部より弯曲して口縁部となり、端部には内傾する面をもつ。口縁部より体部上半にかけて六条の櫛描波状文が施される。調整は外面部め方向のハケ、内面は底面付近にハケ、口縁部内面には指頭圧痕が顕著に認められる。（2）は2号墓東北溝内出土のもので口縁部を欠損する小形の壺である。体部よりだらかに頸部になる形態を有し、外面には全く装飾が施されない。調整は外面部細かいハケで、内面もハケである。（3）は3号と4号墓を区画する溝から出土した大形の壺である。体

部よりなだらかに頸部に移行し、口縁部は大きく開く。外面には七条の振幅の大きい梅描波状文と一条の描き直線文が、また、口縁端部にはヘラにより刻み目が施されている。

須恵器（第16図）掲載した岡は全てSD-5より出土したものである。（1）、（2）の蓋杯のうち杯蓋は稜線がなくなりシャープさに欠けるものである。天井部はやや丸みを帯びるがやや扁平な感じを与える。杯身は口径に比して器高の低いものである。大井部のケズリは範囲が狭くまた雜に施している。（3）は平底多孔式の瓶である。体部や上方に2対を把手を有し、その部分に一条の沈線を施している。外面にはカキメ、また底部下端にはケズリが認められる。内面は摩滅が著しく成形、調整共に不明である。（4）の壺はほぼ完形に近いものである。口縁部は外方に若干折り曲げ、やや角ばった端部を有する。外面は縱方向の平行タタキで体部下半までカキメが施されている。内面は同心円のタタキが見られる。

## V. まとめ

新免遺跡の調査は今回で14次となるが、以前は当遺跡を弥生時代から古墳時代を中心とする遺跡としては捉えてきたものの、遺跡の具体的な性格等については判然としない点が多くあった。しかし今回の調査及び12次調査において弥生時代の方形周溝墓の存在が明らかとなり、また11次調査では弥生時代の竪穴式住居址の検出を見、当該期の集落と墓地の選地について不十分ながらも捉え得るに至った。

新免遺跡の調査において弥生時代の遺構・遺物を検出した地点は今回の調査地点の他、1・2・4・11・12の各調査地点が挙げられる。以下簡単に概要を示しておく。

1次調査地点は遺跡の立地する丘陵西端部に位置する。当調査地点では畿内第III～IV様式の遺物包含層を検出している。遺構については溝等で明確な住居址は認められなかった。

2次調査地点は1次調査地点よりやや丘陵中央部寄りに位置する。畿内第IV様式のピット及び大型蛤貝石斧や石鎌が出土している。部分的な調査であったため遺構の性格については明確にし難い。

4次調査地点は丘陵北側やや中央よりに位置する。畿内第III様式より第IV様式に至る土器が2次的な堆積埋土中より出土している。

11次調査地点は丘陵東北部に位置する。当調査地点より5棟の円形プランをもつ竪穴式住居址が検出されたが、このうち最も大型の住居址より畿内第III様式～第IV様式の土器が出土している。尚、当調査地点南西端においては南北に走行する谷地形を検出しておらず、遺跡の東限を画するものである可能性が強い。

12次調査地点は丘陵中央部の13・14次調査地点の中間に位置し、3基の方形周溝墓を検出している（第17図）。このうち1基は一辺6.5mの小規模なもので、東南隅に幅90cmの陸橋部をもつ。他の2基は大半が調査区外へ延びるため規模については詳らかにし難い。何れも後世の削

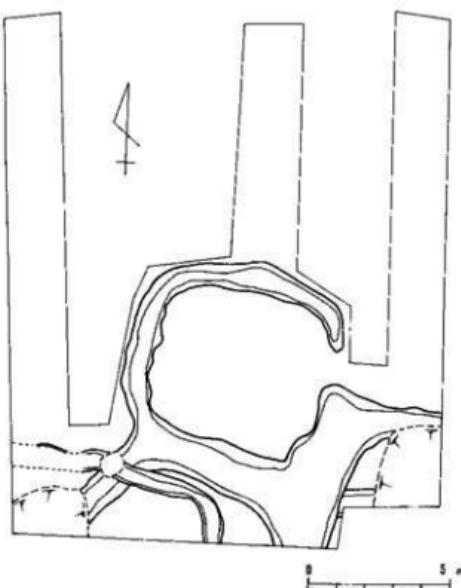
平により主体部及び盛土の有無は不明である。遺構に伴う遺物がなく時期は判然としないが調査地点の位置より推して弥生時代中期に比定されるものと思われる。

II章でも述べた如く、新免遺跡の立地する丘陵は西方に張り出し北側及び西側を千里川によって囲まれた地形を呈している。しかし明治20年測図の参部本謀陸軍部測量局『京阪地方仮製地形図』によれば、当丘陵は南方の山ノ上遺跡の立地する丘陵と同一のものでなく、途中東方にくびれる谷わば谷状と称すべき箇所が存在し、既述したように

11次調査地点では南北に走行する谷状の地形を検出しておらず、東南部は不明であるが、ほぼ四方を囲まれた地形を呈していたものと考えられる。この範囲は東西400m、南北600mを測り、比較的平坦な面を有している。当初、弥生時代の集落はこの範囲において点在しているものと考えられていたが、上述した調査成果及び今回の調査より、居住区は台地縁辺部に、墓地は丘陵中央部にと明確に区別して選地しているものと類推される。

居住地に関しては11次調査で竪穴式住居址が検出されているのみで、1次・2次・4次とも遺構の性格は不明である。調査範囲が狭く全く推測の域を出す、今後の調査に期すべき所が多いが、恐らく千里川の河岸後背湿地に小規模な水田を営み、それを見おろし、また水利にも適した丘陵縁辺部に各単位の居住地を選定したのではないかろうか。また墓地はそれよりも奥まった、各居住地からほぼ等距離に位置する丘陵中央部に選地したものと思われる。遺跡の東南部については幾つかの立会調査を実施してきたが、弥生時代の遺構及び遺物は確認されておらず或いは弥生時代の遺構は丘陵部を半月状に広がるものと推定し得る。

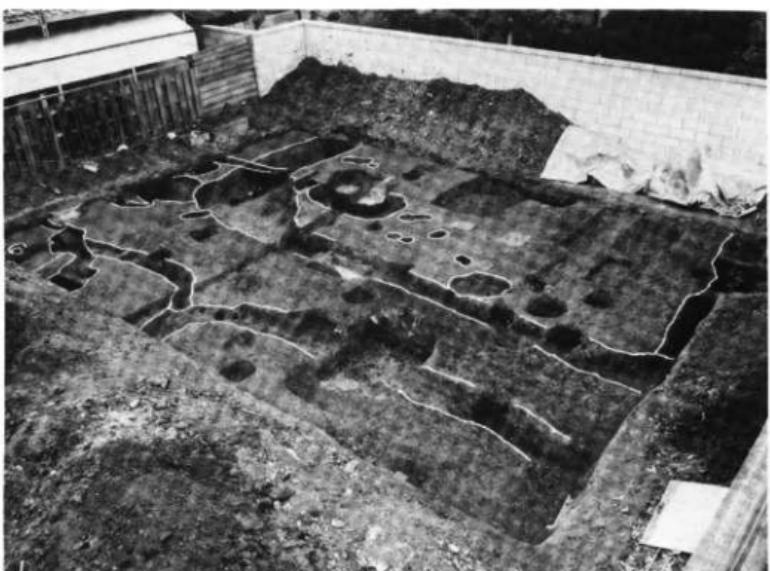
さて、今回の調査のうち、14次調査地点において検出した方形周溝墓群は非常に小規模なものであり、埋葬主体は何れも1基程度であった可能性が強い。同様に12次調査地点検出の方形周溝墓も小規模で、埋葬主体は1基程度と思われる。しかし、2号墓の墳丘部には若干の盛土



第17図 第12次調査地点検出遺構全体図

が認められ、また1号墓に認められた埋葬主体底面レベルから推して、本末の墳丘高の周溝底面との比高差は少なくとも1mはあったものと考えられ、視覚的には相当高い墳丘部を有していたものと思われる。これらの時期は周溝内出土土器より畿内第II様式と考えられ、当遺跡で当該期の居住地の存在を窺わせる。またすぐ南に位置する山ノ上遺跡では畿内第I様式の土器が出土しており、両遺跡の関係も注意されなければなるまい。

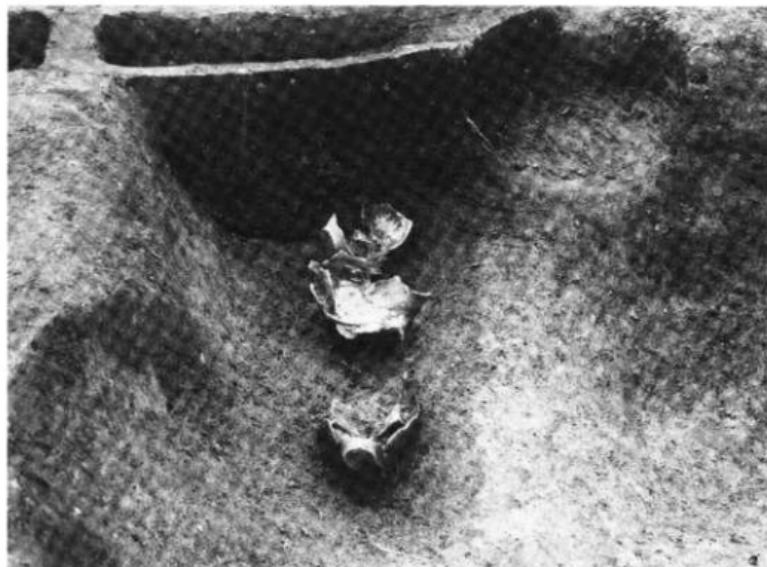
尚、13次調査地点検出のSD-3、SD-7は土器の出土状態、及び壺体部下半にみられる穿孔より、方形周溝墓である可能性も残っている。但し調査範囲が限定されていたため、確認はできなかったが、仮にそうであるならば墓地は広範囲に分布し、また12次調査地点検出の方形周溝墓との間に空間部が存在することになり、幾つかの群に分かれていた事も予想される。何れにしても、今後の調査で墓域の構成、及び居住地と墓域の関係がよりいっそう明らかになるであろう。



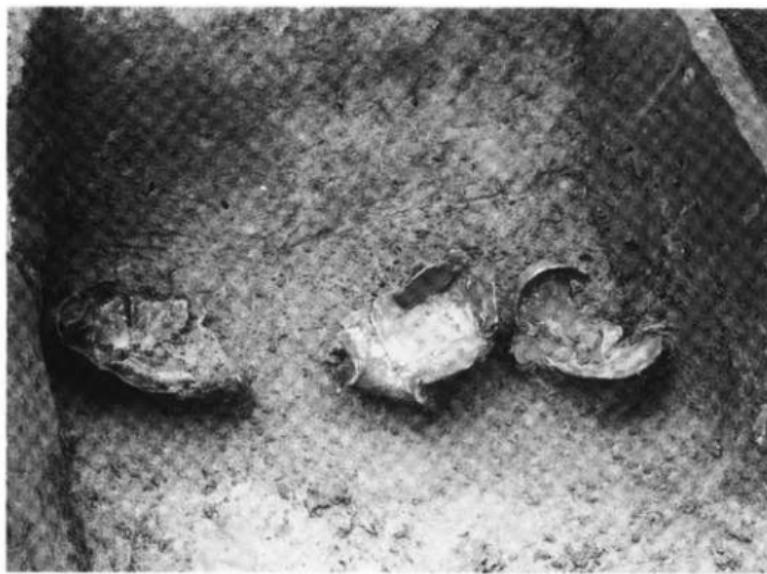
(1) 遺構検出状況（東南から）



(2) SD-3屈曲部検出状況（南から）



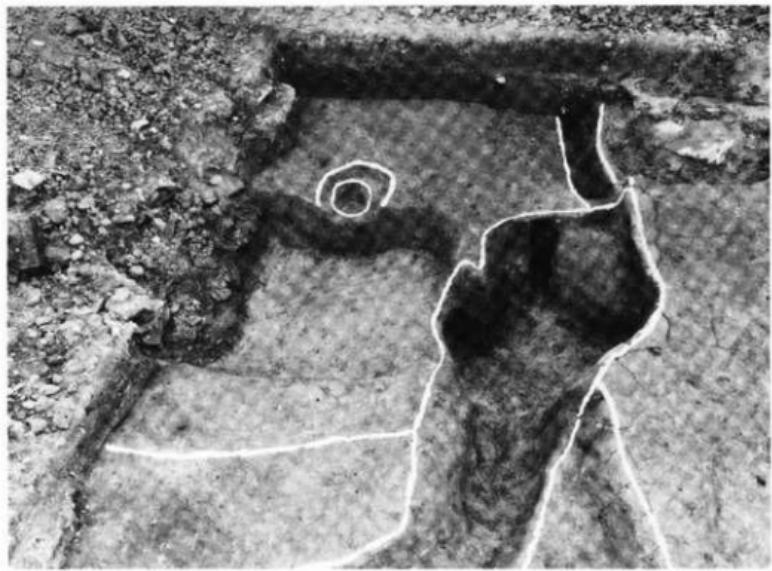
(3) SD-3 屈曲部土器群出土状況（南から）



(4) 同 上（東から）



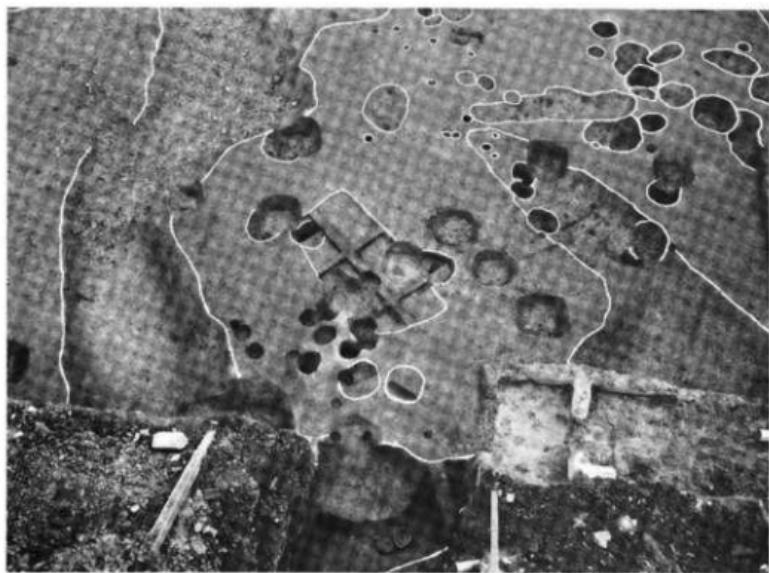
(5) SD-7 上層土器群出土狀況



(6) SB-1 檢出狀況



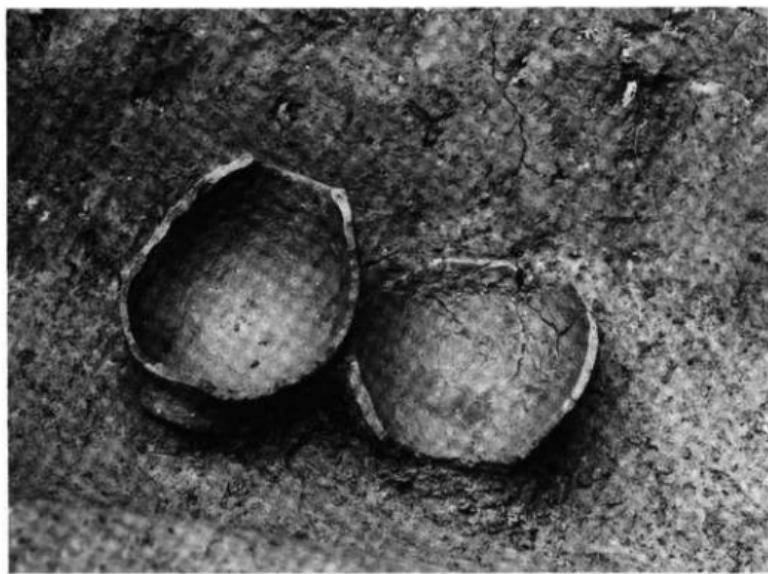
(1) 遺構検出状況（北から）



(2) 1号墓検出状況（北から）



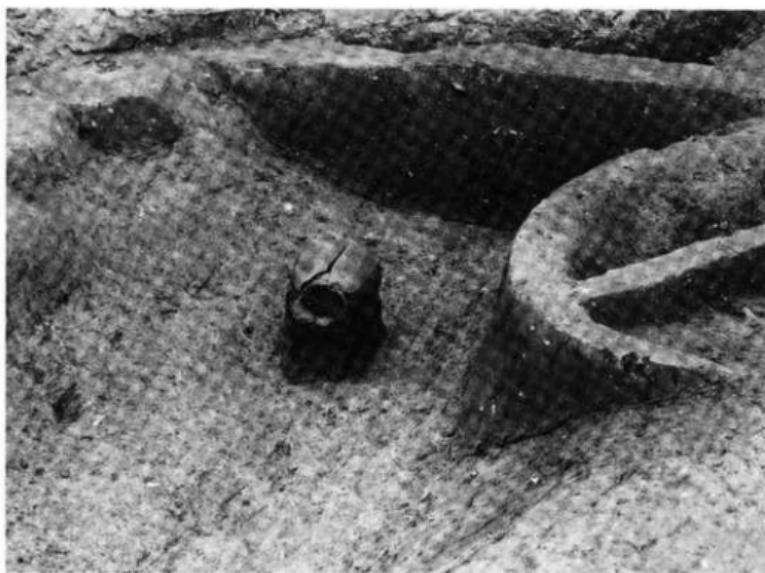
(3) 1號墓北邊周溝內土器出土狀況



(4) 同 上



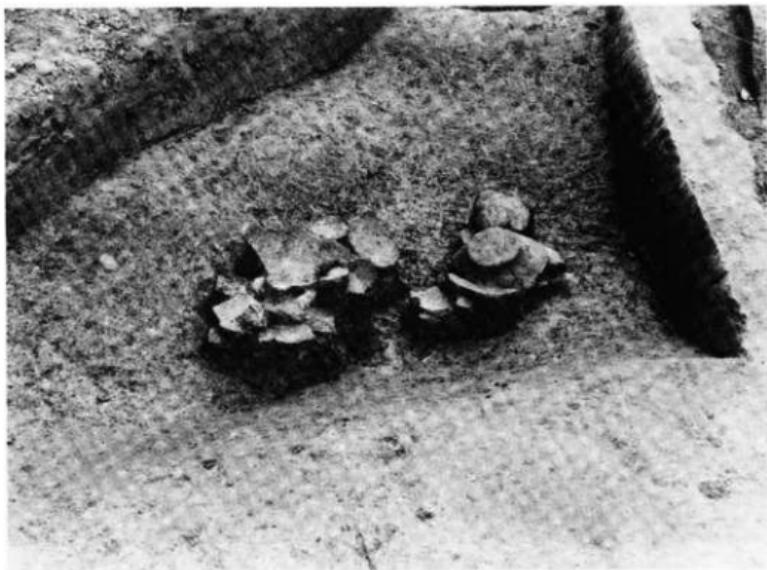
(5) 2号墓, SD-5検出状況(北から)



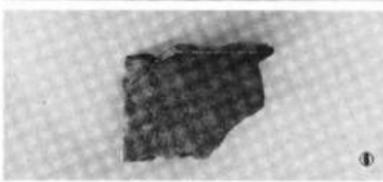
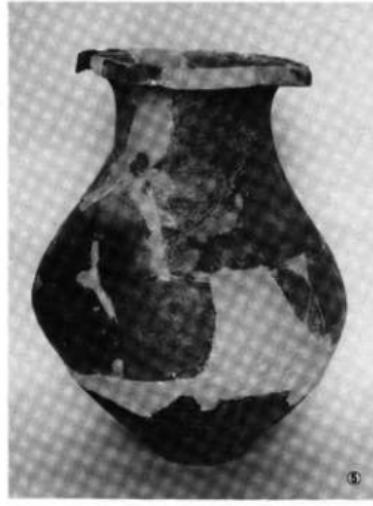
(6) 2号墓東北辺周溝内土器出土状況



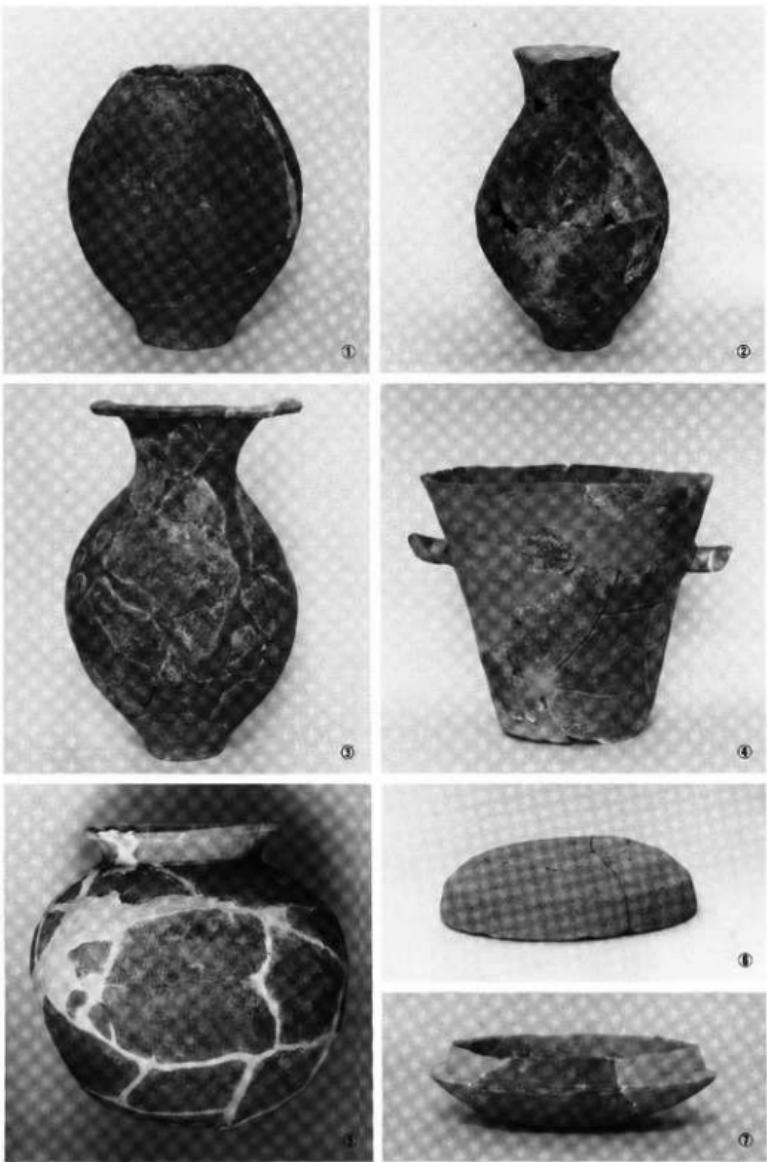
(7) 3号墓、4号墓検出状況（北から）



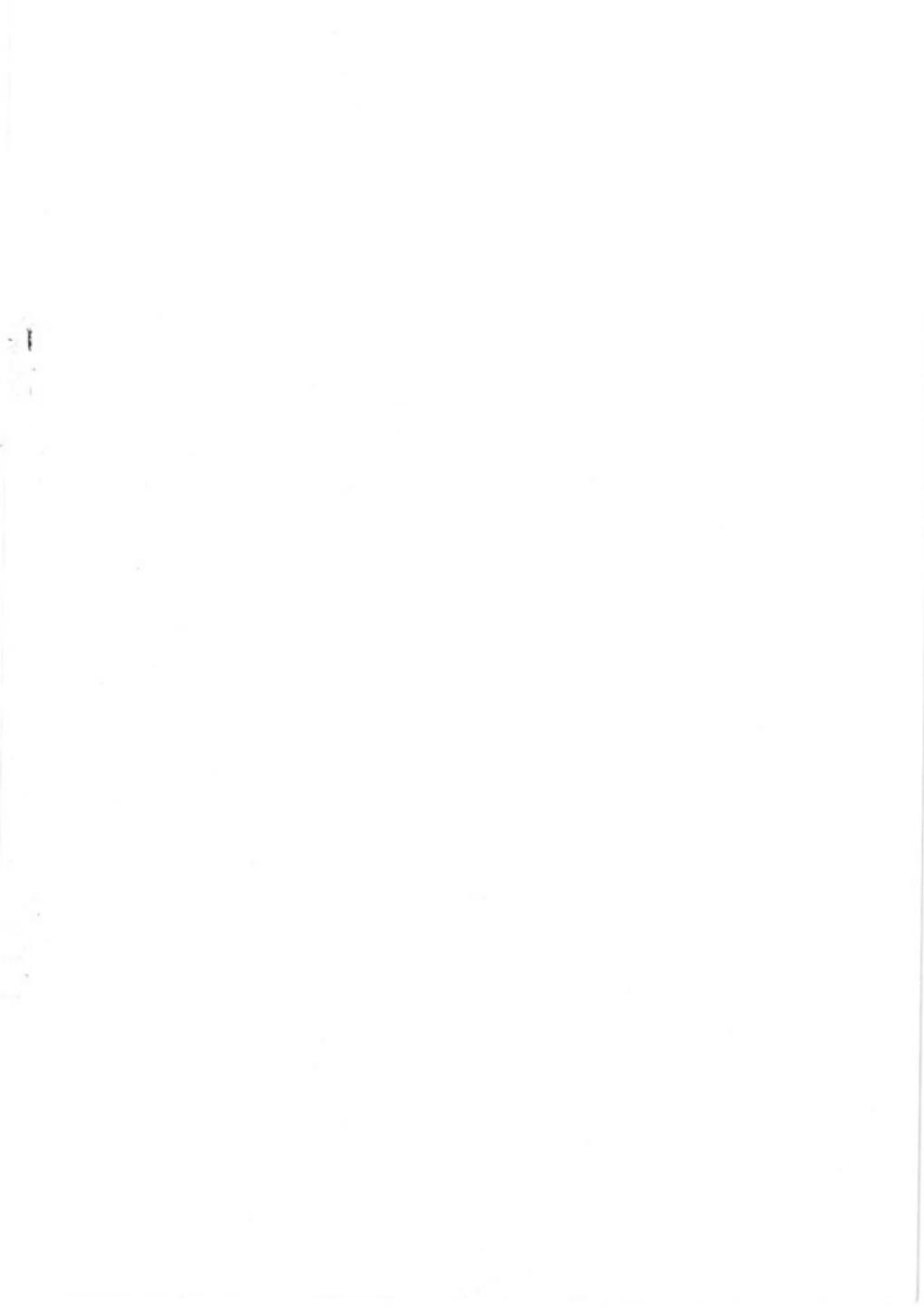
(8) 3号墓東北辺周溝内土器出土状況



1 ~ 3 SD - 3 扉曲部土器群 4 SD - 3 埋土内  
5 · 6 SD - 7 上層土器群 7 SD - 7 下層



1 1号墓北辺周溝内 2 2号墓東北辺周溝内 3 3号墓東北辺周溝内  
4~7 SD-5埋土内



豊中市文化財調査報告第15集

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1986年3月

発行 豊中市教育委員会

豊中市中桜塚3丁目1-1

編集 社会教育課文化係

印刷 やまかつ株式会社